



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（119-129）
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2021, 19, p. 1-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106147
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムファッダリーヤート試訳

—— (119) アルカマ・ブヌ・アバダ ——

عَلْقَمَةُ بْنُ عَبْدِ

池田 修*

まえがき

本名アルカマ・ブヌ・アバダ・ブヌ・アンヌアマーン (°Alqama b. °Abada b. al-Nu°mān)。この詩人の名前アルカマは苦味、アバダは力という意味で（力の子苦味）という妙な名前である。この詩と次の No. 120 の詩は古代アラブ文学史上最も評価の高い作品とされている。彼がどの時代の人であったかを知る情報は乏しいが、この詩が何時作られたかは詩の内容により明らかになる。彼はジャーヒリーヤ時代の詩人の中で比類ない長詩を3編残しており、2編は本詩集に収録されている。『詩と詩人たち』および『歌の書』には、大詩人イムル・アルカイスとの関係について以下のような伝説が伝えられている。

イムル・アルカイスは父が殺されたあと、復讐を決意し支援を求めて旅に出るが、その間、しばらく、タイイ族のもとに留まった。そこで、彼はウナム・ジュンドゥブ (°Umm Jundub) という女性を妻にした。

やがて、彼はアルカマと知り合いになった。両者はラクダと馬について、どちらが優れた詩をつくれるか競争することになり、それぞれの詩の優劣の判定をウナム・ジュンドゥブに委ねた。

彼女はアルカマが馬について詠んだ詩がイムル・アルカイスの詩よりも優れていると判定した。イムル・アルカイスは激怒して、彼女を離婚した。すると、アルカマは彼女と結婚してしまった。その結果、アルカマにはアルファフル (al-Fahl、種馬、優れた詩人) という綽名がつけられた (『詩と詩人達』 pp. 107-109、『歌の書』 17, pp. 121ff.)。

この伝説の真偽はともかく、イムル・アルカイスが復讐の旅にでたのは AD 530-540 年ごろと言われているから、アルカマが6世紀中葉に活躍していたことが推定される。

この詩はガッサーン家の王アルハーリス・ブヌ・ジャバラ・アルアアラジュ (al-Hārith b. Jabala al-°A°raj) がラフム家の王アルムンジル・ブヌ・マーイ・アッサマーウ (al-Mundhir b. Mā° al-Samā°) を破ったアイン・ウバーグ (°Ayn °Ubāgh) の戦いに触れている。

この戦闘は AD 554 年 6 月のキリスト昇天祭の日に行われた。この戦いでアル

* 大阪外国語大学 名誉教授

〔池田修先生のご意向により、本号掲載の「試訳」校正は高階が担当しました。〕

ハーリス王が捕らえた者のなかにシャアス (Sha's) という者がいたが、これが詩人の兄弟 (一説では甥) であった。

すなわち、この詩は詩人が戦勝した王にシャアスの解放を訴えたものである。

以上、イムル・アルカイスとの関係伝説、およびガッサーン家の王への訴えの二件以外にはアルカマの生涯に関する情報は見当たらない。しかし、彼に関してはずっと後の詩人らとの交流があったとする言い伝えがある。例えば、『歌の書』には彼がガッサーン家の最後の王ジャバラ・ブヌ・アルアイハム (Jabala b. al-ʿAyham) の宮殿で有名な詩人アンナービガ・アッズブヤーニーや預言者の詩人と言われたハッサーン・ブヌ・サービトなどに会った、という言い伝えである (『歌の書』14, p. 2)。

また、彼の詩集には第二次アルクラーブの戦いの際、彼が詠んだとされる詩が載っている。この戦いは AD 612 年にあった。しかし、この詩は彼の息子のアリー (ʿAlī) の作だとも言われている。ここで訳す詩が 554 年の作だとすれば、これらの言い伝えはありえないこととなる。

この詩は目的に言及しながら、巧みに構成されている。1-10 行は興味深い愛の序詞、特に 8-10 行は有名である。そのあと、アルハーリス王を訪ねる旅に触れ、ラクダの描写 (11-20 行) に移る。21-22 行では王への訴え、その後が一部欠落しているらしい。29-39 行では激しい戦闘の様子が語られているが、アラブ詩の傑作とされている部分でもある。

詩人は王の敵軍に属し運悪く敗北したが、卑下した態度は見せていない。勝利した王の指導力は賞賛しているが、敗れたアルムンジル王の死を戦死とし (31 行)、勝利した王が送った刺客の裏切りによるとの伝説を支持していない。最後の部分でシャアスの解放を訴えている。アルアンバーリーのテキストでは 37 行となっているが、他の写本などを参考にしてカイロ版では 43 行となっており、訳はこれによった。タウィール調、43 行。

(119) テキスト

وَقَالَ عَلْقَمَةُ بْنُ عَبْدِةَ بْنِ النُّعْمَانِ بْنِ قَيْسٍ

- | | |
|--|--|
| ١- طَحَا بِكَ قُلُوبٌ فِي الْحِسَانِ طَرُوبُ | بُعَيْدَ الشَّبَابِ عَصَرَ حَانَ مَشِيبُ |
| ٢- يُكَلِّفُنِي لَيْلَى وَقَدْ شَطَّ وَلِيُّهَا | وَعَادَتْ عَوَادٍ بَيْنَنَا وَخُطُوبُ |
| ٣- مُنْعَمَةٌ مَا يُسْتَطَاعُ كِلَامُهَا | عَلَى بَابِهَا مِنْ أَنْ تُزَارَ رَقِيبُ |
| ٤- إِذَا غَابَ عَنْهَا الْبُعْلُ لَمْ تُفَشِ سِرُّهُ | وَتُرْضِي إِيَّابَ الْبُعْلِ حِينَ يُؤُوبُ |
| ٥- فَلَا تَعْدِلِي بَيْنِي وَبَيْنَ مُعَمَّرٍ | سَقَتِكَ رَوَايَا الْمُرْنِ حِينَ تَصُوبُ |
| ٦- سَقَاكِ يَمَانٍ دُو حَبِيٍّ وَعَارِضٍ | تَرْوُحُ بِهِ جُنْحَ الْعَشِيِّ جُنُوبُ |
| ٧- وَمَا أَنْتَ أَمْ مَا ذِكْرُهَا رَبْعِيَّةٌ | يُحْطُ لَهَا مِنْ ثَرَمَدَاءَ قَلِيبُ |
| ٨- فَإِنْ تَسْأَلُونِي بِالنِّسَاءِ فَإِنِّي | بَصِيرٌ بِأَدْوَاءِ النِّسَاءِ طَبِيبُ |

فَلَيْسَ لَهُ مِنْ وَدْهِنَ نَصِيبُ
وَشَرُخِ الشَّبَابِ عِنْدَهُنَّ عَجِيبُ
كَهْمِكَ فِيهَا بِالرِّدَافِ حَبِيبُ
فَوَارِيرُ فِي أَذْهَانِهِنَّ نُضُوبُ
لِكُلِّكِلْهَا وَالْمُضَرِّيْنَ وَجِيبُ
عَلَى طُرُقِ كَأَنَّهِنَّ سُوبُ
وَحَارِكْهَا تَهْجُرُ فِدُوبُ
مِنَ الْأَجْنِ حِنَاءٌ مَعًا وَصِيبُ
مَوْلَعَةٌ تَخْشَى الْقَنِيصَ شُبُوبُ
رَجَالٌ فَبَدَّتْ بَنَلُهُمْ وَكَلِيبُ
فَقَدْ قَرَّبْتَنِي مِنْ نَدَاكَ قَرُوبُ
بِمُشْتَبِهَاتٍ هَوْلُهُنَّ مَهِيبُ
لَهُ فَوْقَ أَصْوَاءِ الْمَتَانِ عُلُوبُ
فَبَيْضٌ وَأَمَّا جِلْدُهَا فَصَلِيبُ
فَإِنَّ الْمُنْدَى رَحْلَةً فَرُكُوبُ
فَإِنِّي أَمْرُؤُ وَسَطُ الْقَبَابِ غَرِيبُ
وَقَبْلَكَ رَبَّتَنِي فَضِعْتُ رُبوبُ
تَنْزَلَ مِنْ جَوِّ السَّمَاءِ يَصُوبُ
وَعُودِرَ فِي بَعْضِ الْجُنُودِ رَيْبُ
لَأَبُو خَزَايَا وَالْإِيَابُ حَبِيبُ
وَأَنْتَ لِبَيْضِ الدَّارِعِينَ ضَرُوبُ
عَقِيلًا سُيُوفٍ مِخْذَمٌ وَرَسُوبُ
وَقَدْ حَانَ مِنْ شَمْسِ النَّهَارِ غُرُوبُ
فَأَنْتَ بِهَا عِنْدَ اللَّقَاءِ حَصِيبُ
كَمَا حَشَحَشْتَ يُبْسَ الْحِصَادِ جُنُوبُ
وَهَنْبٌ وَقَاسٌ جَالَدَتْ وَشَيْبُ
وَمَا جَمَعَتْ جَلٌّ مَعًا وَعَتِيبُ
بِشِكَّتِهِ لَمْ يُسْتَلَبْ وَسَلِيبُ
صَوَاعِقُهَا لَطِيرُهُنَّ دَبِيبُ
وَالْأَطْمَرُ كَالْقَنَاقَةِ نَجِيبُ
بِمَا أَبْتَلَّ مِنْ حَدِّ الظُّبَاتِ خَضِيبُ

٩- إِذَا شَابَ رَأْسُ الْمَرْءِ أَوْ قَلَّ مَالُهُ
١٠- يُرْدَنُ ثَرَاءُ الْمَالِ حَيْثُ عَلِمْنَهُ
١١- فَدَعَهَا وَسَلَّيَ اللَّهُ عَنْكَ بِجَسْرَةٍ
١٢- وَعَيسَ بَرِينَاهَا كَأَنَّ عُيُونَهَا
١٣- إِلَى الْحَارِثِ الْوَهَّابِ أَعْلَمْتُ نَاقِصِي
١٤- تَتَّبَعُ أَفْيَاءَ الظَّلَالِ عَشِيَّةً
١٥- وَنَاجِيَةَ أَفْنَى رَكِيبِ ضُلُوعِهَا
١٦- فَأَوْرَدْتُهَا مَاءً كَأَنَّ جِمَامَهُ
١٧- وَتُصْبِحُ عَنْ غِيبِ السُّرَى وَكَأَنَّهَا
١٨- تَعَفَّقُ بِالْأَرْطَى لَهَا وَأَرَادَهَا
١٩- لَتُبْلِعَنِي دَارَ أَمْرِي كَأَنَّ نَائِيَا
٢٠- إِلَيْكَ أَبَيْتَ اللَّعْنَ كَانَ وَجِيفُهَا
٢١- هَدَانِي إِلَيْكَ الْفَرْقَدَانِ وَلَا حَبَّ
٢٢- بِهَا جِيفُ الْحَسْرَى فَأَمَّا عِظَامُهَا
٢٣- تُرَادُّ عَلَى دِمَنِ الْحِيَاضِ فَإِنْ تَعَفَّ
٢٤- فَلَا تَحْرِمَنِي نَائِلًا عَنْ جَنَابَةِ
٢٥- وَأَنْتَ أَمْرُؤُ أَفْضَتْ إِلَيْكَ أَمَانَتِي
٢٦- وَلَسْتُ لِإِنْسِي وَلَكِنْ لِمَالِكِ
٢٧- فَادَّتْ بَنُو كَعْبِ بْنِ عَوْفٍ رَبِيبَهَا
٢٨- فَوَاللَّهِ لَوْلَا فَارِسُ الْجَوْنِ مِنْهُمْ
٢٩- تُقَدِّمُهُ حَتَّى تَغِيبَ حُجُولُهُ
٣٠- مُظَاهِرُ سِرْبَالِي حَدِيدٍ عَلَيْهِمَا
٣١- فَقَاتَلْتُهُمْ حَتَّى اتَّقَوْكَ بِكَبْشِهِمْ
٣٢- تَجُودُ بِنَفْسٍ لَا يُجَادُ بِمِثْلِهَا
٣٣- تَحْشَحَشُ أَبْدَانُ الْحَدِيدِ عَلَيْهِمْ
٣٤- وَقَاتَلَ مِنْ غَسَّانِ أَهْلِ حِفَاطِهَا
٣٥- كَأَنَّ رِجَالَ الْأَوْسِ تَحْتَ لَبَانِهِ
٣٦- رَغَا فَوْقَهُمْ سَقْبُ السَّمَاءِ فَدَاحِضُ
٣٧- كَأَنَّهُمْ صَابَتْ عَلَيْهِمْ سَحَابَةٌ
٣٨- فَلَمْ تَنْجُ إِلَّا شَطْبَةً بِلِجَامِهَا
٣٩- وَإِلَّا كَمِيٍّ ذُو حِفَاطٍ كَأَنَّهُ

- ٤٠- وَأَنْتَ أَرْزَلْتَ الْخُنْزَوَانَةَ عَنْهُمْ
 ٤١- وَأَنْتَ الَّذِي آثَارُهُ فِي عَدُوِّهِ
 ٤٢- وَفِي كُلِّ حَيٍّ قَدْ خَبَطْتَ بِنِعْمَةٍ
 ٤٣- وَمَا مِثْلُهُ فِي النَّاسِ إِلَّا أَسِيرُهُ
 بِضَرْبٍ لَهُ فَوْقَ الشُّؤُونِ دَبِيبُ
 مِنَ الْبُؤْسِ وَالنُّعْمَى لَهُنَّ نُذُوبُ
 فَحَقُّ لِسْأَسٍ مِنْ نَدَاكَ ذُئُوبُ
 مُدَانٍ وَلَا دَانٍ لِدَاكَ قَرِيبُ

(119) 訳

- 1- 青春ははるかに過ぎ去り、白髪に覆われる年を迎えているにもかかわらず、美人に接するとお前の高ぶる心の悲しみは果てしなく広がった。
- 2- 私の心はライラーへの思いで悩まされるが、彼女は遠くに住んでおり、我らの間には、何かと障害や用件があって（会うことがかなわない）。
- 3- 彼女は幸せに暮らしているが、彼女と会って語り合うことはできない。すなわち、彼女の住まいの入り口には番人がいて、彼女の訪問者を拒んでいるからだ。
- 4- 彼女は夫が不在の時には、夫の秘事を他人に話すようなまねはしない。夫が帰ってくるときには、安らぎを覚えさせるように迎える。
- 5- さて、そなたは私と経験不足な男とを同じだなどに見なしてはならぬ。雨雲がそなたの上に慈雨を恵みますように。
- 6- 日没時に南風がもたらすアルヤマン生まれで地表に垂れ下がった積雲がそなたの上に慈雨を恵みますように¹⁾。
- 7- お前（詩人本人）が、ラビーア族の彼女のことを思ってみたところで（彼女は遠くに住んでいるのだから）何になるか。彼女にはサルマダーウに井戸が掘られているのだ²⁾。
- 8- 君達が女について私に尋ねるならば（結構なことだ）。と言うのは、私は女の病（とその薬、扱い方）に通じており、これの練達者であるからだ。
- 9- 男の頭が白くなるか財産が減ってしまえば、彼女らの愛情にあずかる余地はなくなる。
- 10- 女たちは財産があると知ると、それが多いことを望むものだ。だが、（金は無くとも）青春の初期の男は彼女らには魅力がある。
- 11- よって、彼女のことは捨て置き、お前の不安を忘れるために剛毅な雌ラクダに乗って出かけよ。このラクダにはお前が思っているとおり、二人を乗せて調子よく歩を進める力がある。
- 12- 我らは、なんと多くの赤味がかった白ラクダを疲れさせたことだろう。ラクダの目は窪んでしまい、香料が空になったガラス瓶のようになった³⁾。
- 13- 贈り物をよくするアルハーリス王のもとへと、私の雌ラクダを急がせた。ために、ラクダの胸と最前部の肋骨二本が動悸した。
- 14- ラクダは夕方、旅路の木陰に沿って進んだが、それは、まるで、アマ布の切れ端を

1) yamān-in アルヤマンの方角からの南風。雨をもたらし、生命と肥沃に資すると見なされていた。

2) サルマダーウ *Tharmadā'* はサアド族のアッシターナーニ *al-Sitānāni* 溪谷の村、または、アルヤマーマのワシム *Washm* の地名などと言われているが詳細は不明。ラビーアとは、*Rabī'a b. Mālik b. Zayd Manāt b. Tamīm* の女のこと。この行は 4 行目のあとに配置すべきもの。

3) 他の写本から追加した 1 行。

- 並べたようであった⁴⁾。
- 15- 多くの早駆けするラクダは、最も暑い真昼時に追い立てられるため、肋骨を包む脂身も肉も、また、背中の上部の盛り上がりもすべてそぎ落とされてしまった。
- 16- 私はラクダを水場に連れて行ったが、そこは汚水の溜まり場のようで、ヘンナとサビーブを混ぜ合わせたように、赤く濁っていた⁵⁾。
- 17- 夜旅のあと朝を迎えたラクダは、まるで、獵師を恐れて逃げる斑点模様の若牛のように、はつらつとしていた⁶⁾。
- 18- 獵師たちは野牛を求めて、アルアルターの茂みに身を潜め、獵犬を用いて野牛を捕らえようとしたが、野牛は彼らの矢も（犬も）かわして逃げてしまった⁷⁾。
- 19- 私のラクダは、遠くに住んでいるあるお方の館に私を届けようと旅を急ぎ、あなたの恩恵を求める（このラクダ）は、ついに私をあなたのお側へと導いた⁸⁾。
- 20- あなたのもとへとラクダは駆けてきました。おお、大君よ、大君が呪いから守られますように⁹⁾。ひとかたならぬ恐怖にみちた旅路をたどり、参上いたしました。
- 21- 大君のもとへと私を導いてくれたのは小熊座のベータとガンマーの2星¹⁰⁾、および広い道でした。でこぼこ道の積み石標識の上には（人が通った）あとが伺われました。
- 22- でこぼこ道には疲れて死んだ動物の死体が多くあり、その骨はすでに白骨となり、皮は干乾びていました。
- 23- 雌ラクダは汚れた水場に連れて行かれました¹¹⁾。もし、ラクダが水を飲むのを拒めば、もはや、ラクダに乗って旅を続けるほかはありませんでした。
- 24- このようにして遠隔地からはるばる訪ねて来た私に、御恵みを拒まないで下さい。私は大君の天幕のなかにおいて一人の異国者に過ぎません。
- 25- あなたは私が全幅の信頼を寄せるお方です。あなたより前には私が仕えた王達がいましたが、いまや、すべてを失いました。
- 26- あなたは人間に属するお方ではなく、天上から下された天使のお一人として降臨されたお方です¹²⁾。

4) 他の写本から追加した1行。

5) ヒンナーウ ḥinnā、サビーブ ṣabīb は、いずれも染料に使う植物。人が立ち寄らない遠隔地の水場では、しばしば、水がよどみ変色していてとても飲めるようなものではなかった。

6) muwallaʿa は四肢に黒い斑点がついている牛をさす。shabūb には、若さと老年の両義がある。若さで訳したが、カイロ版では老年と説いている。

7) アルアルター al-ʾaltā は砂漠に茂る木で獵師の隠れ場として古詩によく登場する。kalību と主格にしているのは、ʾarāda-hā の主語にしているためだろう。kalība-hā としたかったのであろうが、脚韻と韻律を整えるために主格にしたものだろう。

8) カルーブ qarūb は詩人の馬の名前とする説もあるが、「求めるもの」で訳した。

9) ʾabayta al-laʿna 「呪いから守られますように」という表現は、ラフム朝の王への挨拶言葉で、ガサーン朝の王には yā khayra al-fityāni 「最善の男よ」と言われていた。詩人はガッサーン王に対して、王が敵対していたラフム朝に出入りしていたことを隠さず、このような挨拶をしたものである。mushtabihāt 「標識などのない恐ろしい荒野の旅路」のこと。

10) al-farqadāni 「小熊座のベータとガンマーの二つの星」。

11) al-munaddā 「ラクダに水辺のそばで少し草を食べさせたあと、再び水場に連れて行って水を飲ませること」と説明されている。

12) 他の写本により追加された1行。

- 27- カアブ・ブヌ・アウフの子らは養父を無事に凱旋させましたが¹³⁾、今一人の養父はある地方で裏切られ殺されました。
- 28- 神に誓って申し上げますが、アルジャウンという愛馬に乗った騎士（つまり大君）が出陣されなかったなら¹⁴⁾、彼らは敗北し、恥を偲んで帰還したことでしょう。
- 29- 大君はアルジャウンを前進させ、ために、馬の足の白毛は血に染まって見えなくなりました。その間、大君は鎖帷子で身を固めた敵兵の兜を打ち据え続けました。
- 30- あなたは鉄の鎖帷子を二重にまとい、名刀二振りを備えておられた。すなわち、ミフザム（鋭利な刀）とラスーブ（切り損ねない刀）の二振りです¹⁵⁾。
- 31- かくして、あなたは彼らと戦い、ついに、敵の頭目を御前に引き出されましたが¹⁶⁾、既に、日没の刻限となっていました。
- 32- あなたはかけがえのない御自身を犠牲にされ、出会うたびに高邁な精神でもって豊かに恩恵を施されます。
- 33- 彼らの上で鉄の鎖帷子が擦れ合う音を立てた。それは、南風が収穫期の穀物畑に吹き寄せて立てる音のようであった¹⁷⁾。
- 34- ガッサーン¹⁸⁾の守備兵らは戦った。ヒンブもカースも奮戦し、シャビーブも参戦した。
- 35- アルアウス族の兵らは大君の馬の胸元に控えて、護衛に任じ、ジャッルとアティーブ両族が集めた兵らも同様であった¹⁹⁾。
- 36- 天のラクダの子らが彼らの上でうなり声を上げた²⁰⁾。ある者は身包みはがれることなく、武装したまま倒れて足で地面を探り、ある者は身包みはがれて伏せていた。
- 37- 彼らは、まるで、一片の雲が豪雨を降らせ、その雷に恐れて、空飛ぶ鳥が地面を這って救いを求めているような姿であった。
- 38- その場から逃れることが出来たのは、ただ、手綱をつけた背の高い雌馬か、槍のように細く引き締まった由緒正しい血統の雄馬（の乗り手）だけであった。
- 39- 強固に守った勇士のみが剣先からしたたる血で体を真っ赤に染めながら、逃れるこ

13) バヌー・カアブ・ブヌ・アウフ Banū Ka'b b. 'Awf は Banū 'Awf b. Ka'b の誤り。ガッサーン朝の王家ジャフナ Jafna 家の祖先にあたる。この王家の血統はアラブに良く知られていなかったために生じた誤りであろう。rabīb「養父」とはガッサーン朝の王 al-Hārith b. 'Abī Shamir、裏切られて殺された養父とはラフム朝の王 al-Mundhir b. Mā' al-Samā' のこと。

14) アルジャウン al-jawn「黒色」は、アルハーリス王の馬の名前。戦場にこの馬に乗って王が指揮したので勝てた、言っている。

15) ミフザム Mikhdhām とラスーブ Rasūb の名剣二振りは、預言者のものでもあったと言われているが、アルハーリス王のものと同じものかどうか不明。

16) 敵の頭目とは、ラフム朝の王アルムンジル・ブヌ・マーイ・アッサマーウのこと。なお、この戦いはアイン・ウバーグの日 Yawm 'Ayn 'Ubāgh と呼ばれており、ガッサーン王アルハーリスが宿敵であったラフム朝のアルムンジル王を殺した日とされている。

17) この行は 36 行目に配置すべきもの。

18) ガッサーン Ghassān は、もともと水場の名であった。これに関係する部族には、Māzin b. al-'Azd b. al-Ghaws, Hīn b. 'Ahwadh b. Bahrā', Qās b. Duraym b. al-Qayn b. 'Ahwadh b. Bahrā', Shabīb b. Duraym b. al-Qayn などがあり、いずれも、アルヤマンに出自のあるクダーア系の部族である。

19) アウアウス al-'Aws 族はアルハーリス王の支配下にあった。ジャッル Jall はクダーア系の、アティーブ 'Atīb はジュザーム Judham 系の部族で、彼らは王を護衛していた。

20) 天のラクダの子が彼らの上でうなり声をあげた、というのは、コーランに度々登場するサムードの預言者サーリフにまつわる伝承と関わるものであろう。つまり、ガッサーン王に敗れたラフム朝軍には、おそらく、雷鳴が凶兆となつてとどろいたのであろう。

とが出来た。

- 40- (大君よ、) あなたは彼らの頭蓋骨に音が響くような打撃を加えられ、彼らの誇りをくじいたのです。
- 41- あなたは敵に対して、忘れがたい災難の傷跡と恩恵の印を残されるお方であります。
- 42- あなたは各部族に恩恵を与えられました。よって、シャアスにも²¹⁾、あなたの御恵みをバケツ一杯授けられるのが至当です。
- 43- 彼 (アルハーリス王) の威光に近づける人物は皆無であるが、唯一の例外は王に捕らえられた者である²²⁾。王の親戚の者としてこれには近づけない。

21) シャアスは詩人の兄弟または甥。**khabaṭ-ta** は「知己関係のない者に恩恵を施す」の意味で用いる。**ḍhanūb** は「バケツ」であるが、「豊かな恩恵」の意味もある。アルハーリス王は詩人の訴えに応じて、タミーム族の捕虜全員を解放した。

22) 捕らわれた人とは、おそらく、敗れたアルムンジル王の息子イムル・アルカイスのことであろう。王は騎士道精神を発揮してこの皇子を親族以上に丁重に遇したのであろう。なお、42 行と43 行は逆順となっている。

— (120) アルカマ・ブヌ・アバダ —

عَلْقَمَةُ بْنُ عَبْدِ

まえがき

この詩は No. 119 のそれとは異なり、多様なテーマについて詠まれたものである。すなわち、1-13 行は愛の序詞、14-30 行はラクダ及びダチョウの描写、31-38 行は人生の教訓、39-45 行は酒宴および酒にふれ、46 行は早朝の出撃、47-48 行はマイシルゲームについて述べ、49 行では遠隔地への略奪行、50-57 行では馬やラクダについて語っている。この詩の 18-30 行にわたるダチョウの描写は特に有名で、多くの詩人らによって模倣された。バシート調、57 行。

(120) テキスト

وَقَالَ عَلْقَمَةُ بْنُ عَبْدِ أَيْضًا

- | | |
|--|--|
| أَمْ حَبْلُهَا إِذْ نَأَتْكَ الْيَوْمَ مَصْرُومٌ | ١- هَلْ مَا عَلِمْتَ وَمَا اسْتُودِعْتَ مَكْتُومٌ |
| إِنَّرَ الْأَحَبَّةِ يَوْمَ الْبَيْنِ مَشْكُومٌ | ٢- أَمْ هَلْ كَبِيرٌ بَكَى لَمْ يَقْضِ عِبْرَتَهُ |
| كُلُّ الْجَمَالِ قُبَيْلِ الصُّبْحِ مَزْمُومٌ | ٣- لَمْ أَذِرْ بِالْبَيْنِ حَتَّى أَرْمَعُوا ظَعْنًا |
| فَكُلُّهَا بِالتَّزْيِيدَاتِ مَعْكُومٌ | ٤- رَدَّ الْإِمَاءُ جِمَالَ الْحَيِّ فَاحْتَمَلُوا |
| كَأَنَّهُ مِنْ دَمِ الْأَجَوَافِ مَذْمُومٌ | ٥- عَقْلًا وَرَقْمًا تَظَلُّ الطَّيْرُ تَخْطِفُهُ |
| كَأَنَّ تَطْيَابَهَا فِي الْأَنْفِ مَشْمُومٌ | ٦- يَحْمِلُنْ أُتْرُجَةً نَضْحُ الْعَبِيرِ بِهَا |
| لِلْبَاسِطِ الْمُتَعَاطِي وَهُوَ مَزْكُومٌ | ٧- كَأَنَّ فَاَرَةَ مِسْكِ فِي مَفَارِقِهَا |
| دَهْمَاءُ حَارِكُهَا بِالْقَتَبِ مَحْزُومٌ | ٨- فَالْعَيْنُ مِئِي كَأَنَّ غَرْبٌ تَخْطُ بِهِ |
| كَثُرَ كَخَافَةِ كَبِيرِ الْقَيْنِ مَلْمُومٌ | ٩- قَدْ عُرِّيتْ زَمَنًا حَتَّى اسْتَنْطَفَ لَهَا |
| مِنْ نَاصِعِ الْقَطْرَانِ الصَّرْفِ تَدْسِيمٌ | ١٠- قَدْ أَذْبَرَ الْعُرَّ عَنْهَا وَهِيَ شَامِلُهَا |
| حَدُورُهَا مِنْ أَتَيْ الْمَاءِ مَطْمُومٌ | ١١- تَسْقِي مَذَانِبَ قَدْ زَالَتْ عَصِيفَتُهَا |
| إِلَّا السَّقَاهُ وَظَنُّ الْعَيْنِ تَرْجِيمٌ | ١٢- مِنْ ذِكْرِ سَلَمَى وَمَا ذِكْرَى الْأَوَانِ بِهَا |
| كَأَنَّهَا رَشَاءٌ فِي الْبَيْتِ مَلْزُومٌ | ١٣- صَفَرُ الْوَشَاحِينَ مِنْ الدَّرْعِ خَرْعَبَةٌ |
| جُلْدِيَّةٌ كَأَنَّانِ الضَّحْلِ عُلْكُومٌ | ١٤- هَلْ تُلْحِقَنِي بِأُخْرَى الْحَيِّ إِذْ شَحَطُوا |
| فِي الْحَدِّ مِنْهَا وَفِي اللَّحْيَيْنِ تَلْغِيمٌ | ١٥- كَأَنَّ غِسْلَةَ خَطْمِي بِمَشْفَرِهَا |
| إِذَا تَبَعَّمْ فِي ظِلْمَائِهِ الْبُومُ | ١٦- بِمِثْلِهَا تُقَطِّعُ الْمُؤَمَّاءُ عَنْ عُرْضِ |
| كَمَا تَوَجَّسَ طَاوِي الْكَشْحِ مَوْشُومٌ | ١٧- ثَلَاحِطُ السَّوْطِ شَرًّا وَهِيَ ضَامِرَةٌ |

- ١٨- كَانَتْهَا خَاضِبٌ زُغَرٌ قَوَادِمُهُ
 ١٩- يَظُلُّ فِي الْحَنْظَلِ الْخُطْبَانِ يَنْقُفُهُ
 ٢٠- قُوهُ كَشَقِّ الْعَصَا لِأَيَّا تَبَيَّنُهُ
 ٢١- حَتَّى تَذَكَّرَ بَيَضَاتٍ وَهَيَجَهُ
 ٢٢- فَلَا تَزِيدُهُ فِي مَشْيِهِ نَفَقٌ
 ٢٣- يَكَادُ مَنْسِمُهُ يَخْتَلُّ مُقْتَلُهُ
 ٢٤- وَضَاعَةٌ كَعَصِي الشَّرْعِ جُوجُؤُهُ
 ٢٥- يَأْوِي إِلَى حَسَكِلٍ زُغَرٍ حَوَاصِلُهُ
 ٢٦- فَطَافَ طَوْفَيْنِ بِالْأُدْحِيِّ يَفْقُرُهُ
 ٢٧- حَتَّى تَلَاقَى وَقَرْنَ الشَّمْسِ مُرْتَفِعٌ
 ٢٨- يُوحِي إِلَيْهَا بِانْقَاضٍ وَنَفْنَقَةٍ
 ٢٩- صَعْلٌ كَانَ جَنَاحِيهِ وَجُوجُؤُهُ
 ٣٠- تَحْفُهُ هِفْلَةٌ سَطْعَاءُ خَاضِعَةٌ
 ٣١- بَلْ كُلُّ قَوْمٍ وَإِنْ عَزَّوْا وَإِنْ كَثُرُوا
 ٣٢- وَالْحَمْدُ لَا يُشْتَرَى إِلَّا لَهُ ثَمَنٌ
 ٣٣- وَالْجُودُ نَافِيَةٌ لِلْمَالِ مَهْلِكَةٌ
 ٣٤- وَالْمَالُ صُوفٌ قَرَارٍ يَلْعَبُونَ بِهِ
 ٣٥- وَمُطْعَمُ الْغَنَمِ يَوْمَ الْغَنَمِ مُطْعَمُهُ
 ٣٦- وَالْجَهْلُ ذُو عَرَضٍ لَا يُسْتَرَادُّ لَهُ
 ٣٧- وَمَنْ تَعَرَّضَ لِلْغَزْبَانِ يَزْجُرْهَا
 ٣٨- وَكُلُّ حِصْنٍ وَإِنْ طَالَتْ سَلَامَتُهُ
 ٣٩- قَدْ أَشْهَدُ الشَّرْبَ فِيهِمْ مِزْهَرٌ رِزْمٌ
 ٤٠- كَأْسُ عَزِيزٍ مِنَ الْأَعْنَابِ عَتَقَهَا
 ٤١- تَشْفِي الصَّدَاعَ وَلَا يُؤْذِيكَ صَالِيهَا
 ٤٢- عَانِيَةٌ قَرَقَفَ لَمْ تُطْلَعْ سَنَةٌ
 ٤٣- ظَلَّتْ تَرَفَرُقُ فِي النَّاجُودِ يَصْفِفُهَا
 ٤٤- كَأَنَّ إِبْرِيْقَهُمْ طَبْيٌّ عَلَى شَرْفٍ
 ٤٥- أَبْيَضُ أَبْرَزُهُ لِلصَّبْحِ رَاقِبُهُ
 ٤٦- وَقَدْ عَدَوْتُ عَلَى قِرْنِي يُشَيِّعُنِي
 ٤٧- وَقَدْ يَسَرْتُ إِذَا مَا الْجُوعُ كَلَّفَهُ
 ٤٨- لَوْ يَيْسِرُونَ بِخَيْلٍ قَدْ يَسَرْتُ بِهَا
- أَجْنَى لَهُ بِاللَّوَى شَرِيٌّ وَتَنُومٌ
 وَمَا اسْتَطَفَّ مِنَ التَّنُومِ مَحْدُومٌ
 أَسَكُّ مَا يَسْمَعُ الْأَصْوَاتَ مَصْلُومٌ
 يَوْمٌ رَذَاذٍ عَلَيْهِ الرِّيحُ مَغِيومٌ
 وَلَا الزَّفِيْفُ دُوَيْنَ الشَّدِّ مَسْؤُومٌ
 كَأَنَّهُ حَاذِرٌ لِلنَّخْسِ مَشْهُومٌ
 كَأَنَّهُ بَتْنَاهِي الرَّرُوضِ عُلْجُومٌ
 كَأَنَّهُنَّ إِذَا بَرَّكْنَ جُرْثُومٌ
 كَأَنَّهُ حَاذِرٌ لِلنَّخْسِ مَشْهُومٌ
 أُدْحِيٌّ عَرَسَيْنِ فِيهِ الْبَيْضُ مُرْكُومٌ
 كَمَا تَرَاطُنَ فِي أَفْدَانِهَا الرُّومُ
 بَيْتٌ أَطَافَتْ بِهِ حَرْقَاءُ مَهْجُومٌ
 تُجِيبُهُ بِزَمَارٍ فِيهِ تَرْزِيمٌ
 عَرِيفُهُمْ بِأَثَافِي الشَّرِّ مَرْجُومٌ
 مِمَّا يَضُنُّ بِهِ الْأَقْوَامُ مَعْلُومٌ
 وَالْبُخْلُ بَاقٍ لِأَهْلِيهِ وَمَذْمُومٌ
 عَلَى نِقَادَتِهِ وَافٍ وَمَجْلُومٌ
 أَنَّى تَوَجَّهَ وَالْمَحْرُومُ مَحْرُومٌ
 وَالْحِلْمُ آوَنَةٌ فِي النَّاسِ مَعْدُومٌ
 عَلَى سَلَامَتِهِ لَا بُدَّ مَشْؤُومٌ
 عَلَى دَعَائِمِهِ لَا بُدَّ مَهْدُومٌ
 وَالْقَوْمُ تَصْرَعُهُمْ صَهْبَاءُ خُرْطُومٌ
 لِبَعْضٍ أَحْيَانَهَا حَانِيَّةٌ حُومٌ
 وَلَا يُخَالِطُهَا فِي الرَّأْسِ تَدْوِيمٌ
 يَجْنُهَا مُدْمَجٌ بِالطَّيْنِ مَخْتُومٌ
 وَلِيدٌ أَعْجَمَ بِالْكَتَّانِ مَفْدُومٌ
 مُقَدَّمٌ بِسَبَا الْكَتَّانِ مَرْتُومٌ
 مُقَلَّدٌ قُضِبَ الرِّيْحَانِ مَفْعُومٌ
 مَاضٍ أَخُو ثِقَةٍ بِالْخَيْرِ مَوْسُومٌ
 مُعَقَّبٌ مِنْ قِدَاحِ النَّبْعِ مَقْرُومٌ
 وَكُلُّ مَا يَسِرَ الْأَقْوَامُ مَعْرُومٌ

- ٤٩- وَقَدْ أَصَابَتْ فِتْيَانًا طَعَامُهُمْ
 ٥٠- وَقَدْ عَلَوْتُ قُتُودَ الرَّحْلِ يَسْفَعُنِي
 ٥١- حَامٍ كَأَنَّ أَوَارَ النَّارِ شَامِلُهُ
 ٥٢- وَقَدْ أَفُودُ أَمَامَ الْحَيِّ سَلْهَبُهُ
 ٥٣- لَا فِي شَطَاهَا وَلَا أَرْسَاغِهَا عَتَبُ
 ٥٤- سَلَاءَةٌ كَعَصَا النَّهْدِيِّ غُلَّ لَهَا
 ٥٥- تَتَّبِعُ جُونًا إِذَا مَا هُيِّجَتْ رَجَلَتْ
 ٥٦- إِذَا تَزَعَمَ مِنْ حَافَاتِهَا رُبْعُ
 ٥٧- يَهْدِي بِهَا أَكْلُفُ الْخَدَّيْنِ مُحْتَرٌّ
- حُضِرُ الْمَزَادِ وَلَحْمٌ فِيهِ تَنْشِيمٌ
 يَوْمٌ تَجِيءُ بِهِ الْجَوَازُءُ مَسْمُومٌ
 دُونَ التِّيَابِ وَرَأْسُ الْمَرْءِ مَعْمُومٌ
 يَهْدِي بِهَا نَسَبٌ فِي الْحَيِّ مَعْلُومٌ
 وَلَا السَّنَابِكُ أَفْنَاهُنَّ تَقْلِيمٌ
 دُو فَيْئَةٍ مِنْ نَوَى فُرَانَ مَعْجُومٌ
 كَأَنَّ دُفَا عَلَى الْعَلْيَاءِ مَهْزُومٌ
 حَنَّتْ شَعَامِيمُ فِي حَافَاتِهَا كُومٌ
 مِنَ الْجَمَالِ كَثِيرُ اللَّحْمِ عَيْثُومٌ

(120) 訳

- 1- お前が知っているもの（彼女の気持ち）とお前に預けられたもの（彼女の愛情）を彼女は今も秘めているのだろうか。それとも、今日、遠くへ去った彼女はお前との絆を断ち切ったのだろうか。
- 2- それとも、恋人達が分かれ行くとき、老人が泣いてとめどなく涙を流したなら、苦痛を和らげる報いがあるのだろうか¹⁾。
- 3- 私は離別とは気づかなかったが、彼らは既に旅立ちを決めてしまっていた。すなわち、すべての雄ラクダには夜明けの少し前には手綱が取り付けられていた²⁾。
- 4- 下女らは部族の雄ラクダを牧場から連れ戻し、男達は婦人用の乗り籠をラクダに載せ華やかなタジード産の布で籠を包み隠していた³⁾。
- 5- (乗り籠を包んでいる) 布には赤い刺繍が施されているが、まるで、内臓の血が塗られているようで、鳥達が昼間、肉と思っつつき続ける。
- 6- 彼女（下女）らはシトロンのような芳しい香りを放つ女性を運んできたが、彼女にはサフランの混合香料が振りかけられており、その香りは鼻腔にいつまでも留まっているようであった。
- 7- まるで、彼女の頭髮の分け目にジャコウネズミがいて、風邪のため鼻が詰まり、匂いを感じない男でさえ、手を広げてこれを捕まえようとするほどだ。
- 8- (多量の涙があふれる) 私の目は、まるで、黒い雌ラクダが背中の前部に荷鞍を縛りつけ、(坂道を) 運び下るときに（水がこぼれる）皮バケツのようであった。
- 9- このラクダはしばらくの間、自由に放牧されていたので、背中のごぶがせり上がり、

1) 「別れに及んで流す涙が苦痛を癒す」という表現は、イムル・アルカイスのムアッラカ 6 行に、「だが、私を癒してくれるのは吹き出る涙のみ」とあるのと軌を一にしている。

2) 手綱は夜のうちに取り付けられたらしく、タラファのムアッラカ 10 行でも「旅立ちを決めているのであれば、暗夜にラクダに手綱が取り付けられたに違いない」とある。

3) アッタジーディーヤートは Tazīd b. Ḥaydān b. ʿImrān b. Ilkhāf b. Qudā'a というアルヤマン系の部族のことで、この部族はメソポタミアに移住し、ラクダの婦人用の乗り籠を覆う華やかな布を作った。女性が乗るラクダは雄で、雌ラクダより強いが性格はおとなしい。イムル・アルカイスのムアッラカ 14 行「ラクダに擦り傷をつけたわ、さあ、イムル・アルカイス、降りて」ではラクダに baʿīr (雄雌の区別なし) を用いているが、雄ラクダと考えられる。

- まるで、鍛冶屋のふいごのように、まるまると膨らんでいた。
- 10- ラクダの疥癬は完全に消えて、体に塗られた混ざりけのない純粋なタールの痕跡だけが、体を覆っていた。
- 11- (水が良く流れるように) 密生していた草が取り除かれた水路に、ラクダは水を流すが、下ったところには流れ降りた水が満ちていた。
- 12- サルマーのことを思い出し(涙に暮れても)、遠くに離れてしまった彼女のことを今思うのは愚かなことに他ならない。見えないものをあれこれ憶測しても空しい。
- 13- 彼女(が諦めている)二本の飾り帯のあたりは細くくびれており、(その下方は)柔らかに盛り上がり、腰布がはちきれんばかりであった。あたかも、彼女はテントの中で育てられたガゼルの子のようであった。
- 14- 彼ら(彼女の一族)は遠くに行ったが、その最後尾の人々の元に、川床の浅瀬に据わっている岩のように大きくて丈夫な雌ラクダが、私を届けてくれるだろうか。
- 15- ラクダの唇や頬や顎に付着している薄紅アオイの洗剤は⁴⁾、まるで、食べた草の緑汁の泡のようであった。
- 16- このようなラクダに乗って、砂漠が横切られるのであるが、薄暗がりの中で鼻が気味の悪い鳴き声をあげた⁵⁾。
- 17- この雌ラクダは横目で鞭を見ながら、口を固く結んでいる。まるで、野生の活潑な雄牛が聞き耳をたてるようにして聞く。その胴は引き締まり、四肢には黒い斑点がついている。
- 18- また、このラクダは、両足が赤くなり、両翼の先端の毛が少なくなった雄ダチョウのように駿足である⁶⁾。砂丘の縁のあたりには、雄ダチョウのためにコロシントとタンヌームの実がほどよく熟れている。
- 19- 雄ダチョウは昼間は緑や黄色の線が入ったコロシントの中で過ごし、その実を取り出したり、タンヌームの伸びた芽をかみきって食べる。
- 20- ダチョウの口は杖の裂け目のように閉まっていて、君には直ぐには見分けがつかない。音を聞く耳は小さく、頭についているのだが、まるで、耳が削がれているようだ。
- 21- (餌を食べていた) ダチョウは砂の中の卵のことを思い出した。軽く雨が降る日で、風もあり、空が厚い雲に覆われていたのがダチョウをせきたてた。
- 22- そこで、ダチョウは両足を広げて、倦むことなく走り始めた。全速力よりはやや遅い速度で疲れを見せずに駆けた⁷⁾。
- 23- ダチョウは脚の爪で眼球を突き刺しかねないような(首を下げた)姿勢で(卵のところへ)急行するが、まるで、卵が刺されていないかと恐れ、警戒しているかのようであった⁸⁾。
- 24- ダチョウは駿足の走者で、胸は弦のように弓なりにそっており、牧場の谷底に降り

4) 薄紅アオイは頭を洗う洗剤として用いられていた。

5) al-būm (鼻) はペルシャ語由来のもので、アラビアでは al-hāma または ṣadā と呼んだ。

6) khāḍib は「皮膚と両足が赤くなった雄ダチョウ」と説かれている。

7) shadd, zafif いずれも馬などの走り方を表す語で、前者は「全速力で走ること」、後者は「馬が同じ側の前後の脚を上げてゆっくり歩くこと」。

8) この 23 行の下句と 26 行の下句は同じである。

- て行く黒いタールを塗った背の高いラクダのようだ⁹⁾。
- 25- ダチョウは雛たちの所に帰るが、雛の餌袋の毛は薄く、横になっている姿は（埃に覆われた）樹の根のようである¹⁰⁾。
- 26- ダチョウは卵のある巣の周りを二回巡り歩き、何かの跡がついていないか良く調べる。まるで、卵が刺されていないかと恐れ警戒しているかのようだ¹¹⁾。
- 27- 雄ダチョウは、まだ、日が高いうちに夫婦の巣に着くが、その巣の中には卵が積みあげられている。
- 28- 雄ダチョウは雌ダチョウにコッコッと鳴いたり、さえずったりして話しかけるが、あたかもギリシャ人たちが城の中でわけの分からぬおしゃべりをしているようだ。
- 29- 雄ダチョウの頭は小さくて細い。両翼と胸は、ぎこちない下女が立ち上げ崩れ落ちた、テントのようである¹²⁾。
- 30- 雄ダチョウを取り巻くように首の長い雌ダチョウが寄ってきて、頭を下げ、声を震わせて雄ダチョウに答えた¹³⁾。
- 31- ともあれ、どの部族も、たとえ、威勢があり、多数を擁していても、彼らの首長は、いずれ、五徳の石の標的にされるであろう¹⁴⁾。
- 32- 賞賛は、その買い手が苦痛を覚える対価を支払わなければ買えないものだ、と言うことは良く知られている。もっとも、人々はそれを支払うのを惜しむものだが。
- 33- 気前よさは財産をへらし、消滅させる。これに引き換え、吝嗇は財産を増やすが、一族は非難される¹⁵⁾。
- 34- 財産は耳が細い小さな羊のようなものだ。人々がその毛を弄ぶほど十分なものもあれば、刈り込まれて毛がないものもいる¹⁶⁾。
- 35- 略奪の日、戦利品を与えられる者は何処に向かおうとこれを与えられ、これが許されない者には何も与えられない¹⁷⁾。
- 36- 愚かさは、望まれないにもかかわらず、誰にでも提示される。これに引き換え、よき知性は人々の間でしばしば欠けている。
- 37- カラスに出会って、これを叱って追っ払う者はそのとき無事であっても、（凶兆を見た以上）いずれ、凶運に襲われることは避けられない¹⁸⁾。
- 38- あらゆる砦も、たとえ、長年その柱の上に無事に築かれていても、やがて、崩れることは避けられない。
- 39- 私は時に酒盛りするものたちに加わったことがある。彼らの中には響き渡るリユー

9) ʿuljūm 「黒いタールを塗った大型のラクダ」というカイロ版の説によった。

10) 21 行および 27 行では卵となっており、雛となっているこの 1 行は他の詩から紛れ込んだものであろう。

11) 下の句は 23 行と同じ。この行は 27 行のあとに配置すべきもの。

12) テントは、下女らが立てる習慣があったことを物語る。

13) 雌ダチョウの泣き声は zimār、雄ダチョウのそれは ʿirār と区別されていた。

14) ʾathāfin (単数 ʾathfiya) 「鍋を載せる五徳用の石、通常 3 個」。慣用句に ramā-hum allāhu bi-thāliṭhati al-ʾathāfi 「神が 3 番目の石を彼らに投げた」とあり、3 番目の石とは災難を意味する。つまり「彼らの首長はいずれ、災難の標的になる」と言ったもの。

15) nāfiyatun の語末の tāʾ は強意を表す。bāqin は mubqin 「残す、増やす」の意。

16) bi-hi の -hi は羊毛として訳したが、al-mālu を受けているとすると、「人々は財産をもてあそび、十分貯えることもあれば、散逸させることもある」となる。

17) 「戦利品を得るかどうかは運次第」と述べたもの。

18) からすに石を投げ、声をあげて追っ払うとき、カラスの逃げ方で吉凶を占っていた。

トがあり、人々は汲みたての赤いぶどう酒で酔っていた。

- 40- ブドウで造られた王侯の飲む一杯のぶどう酒は、ある祭りのために居酒屋の多数の男達が準備し、長年寝かせた古酒であった。
- 41- ぶどう酒は頭痛を癒し、その酔いが君を害することはない。また、頭のなかで、目まいを起こすことも無い。
- 42- それはアーナ村産のぶどう酒で、飲み手が震えるほど強い¹⁹⁾。一年間人目にさらされず、土器の中に封印され、土中に隠されていたものである。
- 43- ぶどう酒はガラス瓶の中できらめいている。ペルシャ人の（貴族に仕える）少年奴隷が口にアマブの切れ端をあてがい、水と混ぜたものである。
- 44- (ぶどう酒が入った) 彼らの水差しは、高所に立っているガゼルのように白く、水差しの口はアマブでおおわれ²⁰⁾、鼻がへし折られたようになっている。
- 45- 水差しは白く、これを保管する男はそれを日にさらした。水差しにはメボウキの枝が巻かれ、芳ばしい香りがつけられていた。
- 46- 私は早朝、敵に向かって出撃したものだ。私の伴をしたのは、鋭利で、幸運をもたらすことで信頼のおける味方、すなわち、名だたる名剣であった²¹⁾。
- 47- 私は、筋が引かれたナブウの木で作られら賭け矢に、飢えを消す役目が課せられているときには、よく、マイシルゲームに加わったものだ。賭け矢には歯で刻み目がつけられていた²²⁾。
- 48- 人々が万一、マイシルゲームに馬を賭けるなら、私も馬を賭ける²³⁾。人々が賭けるものに対しては、支払われなければならない。
- 49- また、私は若い戦士らを連れて（遠隔地に）略奪戦によく出かけたものだ。彼らの食糧のなかで、飲み水は緑色に変色し、肉は腐り始めていた。
- 50- 私は双子座（の太陽）が顔面を焦がす熱風をもたらす日に、ラクダの鞍の枠木に乗ってしばしば、旅をした。
- 51- まことに酷暑に見舞われた日で、まるで、火炎が騎手全体を包み、着物を通して肌を焦がすようであった。男の頭にはターバンが巻かれていた。
- 52- 私は背の高い雌馬に乗って部族を先導したものだ。この馬の血統は部族の中では、最も由緒あるものとして知られていた。
- 53- 雌馬の膝の関節や足の甲にはなんら欠陥がなく、ひづめの先を切っても不都合は生じない。
- 54- この馬の脚はナツメヤシのとげ²⁴⁾のように、あるいはナフドの老人の杖のように細

19) アーナ (ʿĀna) はアラビア半島の村と説明されているが、ユーフラテス河畔のブドウ酒の産地として知られた町。qarqaf「飲み手が震えるほどの強い酒」(No. 26, 78 行で既出)。

20) 水差しは銀色で白色、その口にアマブを当ててブドウ酒をこして注ぐ。

21) ʾakhū thiqaṭin「信頼の置ける味方」とは、鋭利な名剣のこと。タラファのムアッラカ 85 行: ʾakhū thiqaṭin lā yanṭhanī ʿan ḍarībatin「信頼の置ける味方で、倒す相手からそれることはない」を参照。

22) マイシルゲーム用の賭け矢に歯で噛んで筋をつけることは、No. 50, 12 行に既出。マイシルは飢餓状態のとき、飢えを解消するためになされるので、賭け矢にその役目が課せられている。

23) マイシルにはラクダが賭けられる。馬が賭けられることはないが、「万一、そうなればそれに応じる」と誇張して言ったもの。

24) al-sullāʾa「ナツメヤシのとげ」を解説では「胸が細い馬」になぞらえているが、全行の続きで、「スマートな脚」に比したほうが自然である。dhū fayʾa「帰すもの」とは、ナツメヤシの実をラクダに食べさせても消火せず、排便すると一層固くなると説かれている。クッラーン Qurʾān は

- くしなやかで、ひづめの中には、一度飲み込まれたクッラーンのナツメヤシの実が排泄されて入れられているようだ。
- 55- 雌馬は黒いラクダ²⁵⁾の群れが搾乳のため、せきたてられると、(ミルクをもらうため) そのあとに従う。その際、大きな声をあげるが、それはまるで高台で、破れ太鼓がかすれた音を響かせているようだ。
- 56- 春、ラクダに子が生まれると、その子は母ラクダの側²⁶⁾で(ミルクを求めて) 可愛く鳴く。すると、大きくて姿が良く、コブの高い母ラクダが(これに答えて鳴く)。
- 57- (ラクダの群れを) 両頬が暗褐色の肉づきがよく大型の経験豊かな雄ラクダが先導する。

アルヤマーマのハニーファ族 Khanīfa の村で、雨は少ないがナツメヤシが多く、その実は固い。
 Nahd は弓を作るナブウ木の産地として知られているが、「その老人」とは誰か不明。

25) 黒いラクダはミルクをよく出すとされていた。

26) ḥāfātī-hā の反復は不自然、「母ラクダのあたりで、そばで」の意味か。

—— (121) フラーシャ・ブヌ・アムル・アルアブシー ——

خُرَاشَةُ بْنُ عَمْرِو الْعَبْسِيِّ

まえがき

詩人の名前はハラーシャ Kharāsha とも読まれる。アブス族の一員である彼の血統は、父アムルまでしか分かっていない。

この詩は、ジャーヒリーヤ時代における最大の戦いの日とされるシウブ・ジャバラの戦い（570年）を勝利者側から詠んだものである。その戦いでは、アーミル・ブヌ・サアサアおよびアブス同盟軍が、タミーム系のダーリムとアサドの一部、ガタファーン系のズブヤーン、キンダの一部、およびアルバハライン出のアルジャウン al-Jawn などの連合軍と戦い、前者が圧勝した。

この戦いで同盟軍は、アブスの族長カイス・ブヌ・ズハイルが立てた次のような戦術で敵の連合軍を圧倒した。まず、前もって狭い谷間の水場からラクダを引き上げておき、敵が山峡に攻め寄るのを待って、ラクダを狭い谷間の水場へ追い立てた。敵は混乱して下方に逃げたが、谷の出口にはジャバラの高台があり、ここにアーミル軍が宿営していて、算を乱した敵に襲い掛かり、殆ど殲滅した。

この戦いで、敗れた連合軍を指揮していたダーリムの族長の息子ラキート・ブヌ・ズラーラは殺された。また、彼の兄弟ハージブ・ブヌ・ズラーラ Ḥajīb b. Zurāra は捕えられた。その身代金は 1000 頭のラクダとされ、アラブの最高の身代金と言われている。この二人にはマアバド Maʿbad という母違いの兄がいたが、ラフラハーンの戦い（No. 11「まえがき」参照）で殺されている。なお、ズラーラは母の名前である（Ibn Qutayba, al-Maʿārif, p. 242）。

この詩人は本詩 5-13 行で、自部族アブスの勝利を誇っており、シウブ・ジャバラの戦いでの同盟軍であったアーミル族のことには触れず、自部族だけで勝ったかのように詠んでいる。タウィール調、14 行。

(121) テキスト

وَقَالَ خُرَاشَةُ بْنُ عَمْرِو الْعَبْسِيِّ

- | | |
|--|--|
| وَقَدْ زَادَ بَعْدَ الْحَوْلِ حَوْلًا مُكَمَّلًا | ١- أَبَى الرَّسْمُ بِالْجَوْنَيْنِ أَنْ يَتَحَوَّلَا |
| نِعَاجَ الْمَلَا تَرَعَى الدَّخُولَ فَحَوْمَلَا | ٢- وَبُدِّلَ مِنْ لَيْلَى بِمَا قَدْ تَحَلَّلَا |
| كَأَنَّ عَلَيْهَا سَابِرِيًّا مُذْيَلَا | ٣- مُلَمَّعَةً بِالشَّامِ سَفْعًا خُدُودَهَا |
| رِمَاحًا تَعَالَى مُسْتَقِيمًا وَأَعَصَلَا | ٤- كَأَنَّ جُنُودًا رَكَزَتْ حَيْثُ أَصْبَحَتْ |
| وَحَيْرٌ بِقِيَّاتٍ بَقِيْنِ وَأَوَّلَا | ٥- فَلَا قَوْمَ إِلَّا نَحْنُ حَيْرٌ سِيَّاسَةً |
| وَأَرْبَطُ أَحْلَامًا إِذَا الْبَقْلُ أَجْهَلَا | ٦- وَأَطْوَلُ فِي دَارِ الْحِفَاطِ إِقَامَةً |

- وَأَجْدَرُ مِنَّا أَنْ يَقُولَ فَيَفْعَلَا
بِحَيْثُ امْتِنَاعِ الْمَجْدِ أَنْ يَتَنَقَّلَا
إِذَا دَهَمَ الْوَرْدُ الضَّعِيفَ الْمَذَلَّ
إِذَا الصَّارِخُ الْمَكْرُوبُ عَمَّ وَخَلَّلَا
تُجَاوِبُ نَوْحًا سَاهِرَ اللَّيْلِ تُكَلَّلَا
صَبَحْنَ مَعَ الْإِشْرَاقِ مَوْتًا مُعْجَلَا
رَقِيقِ الْحَوَاشِي يَتَرُكُ الْجُرْحَ أَنْجَلَا
وَأَلْقَتْ عَلَى كُلِّ جِرَائِنَا وَكُلِّكَلَا
- ٧- وَأَكْثَرُ مِنَّا سَيِّدًا وَابْنِ سَيِّدٍ
٨- قُرُومٌ نَمْتَنَا فِي قُرُوعٍ قَدِيمَةٍ
٩- حُمَاةَ غَدَاةِ الرَّوْعِ يَأْمَنُ سَرْبُنَا
١٠- مَصَالِيْتُ ضَرَابُونَ فِي حَوْمَةِ الْوَعَا
١١- وَنَحْنُ تَرَكْنَا عَنُوءَ أُمِّ حَاجِبٍ
١٢- وَجَمْعَ بَنِي عَنَمٍ غَدَاةَ حُبَالَةٍ
١٣- بِكُلِّ سُرُجِيٍّ جَلَا الْقَيْنُ مَتْنَهُ
١٤- وَعُذْرَةٌ قَدْ حَكَّتْ بِهَا الْحَرْبُ بَرَكَهَا

(121) 訳

- 1- アルジャウナーニの住居跡は変化を拒んでいる¹⁾。しかし、前の年から一年が過ぎた（少しずつ変化している）。
- 2- ライラーが住んでいたテントの跡のあたりは、今や広大な原野に住む野牛にとって代わられ、野牛はアッダフル、ついで、ハウマルのあたりで草をはんでいる²⁾。
- 3- 野牛はさまざまな色合いの斑点で覆われており、頬は褐色で、背には裾の長い白衣をまとっているようだ³⁾。
- 4- (野牛の角は多く) まるで兵らが朝、槍を地面に突き立てているようだった。その一部は高く真っ直ぐで、一部は頑強に屈曲していた。
- 5- 我らほどよく洗練された部族はいない。我らに残されている遺風も祖先も、最善である。
- 6- 我らは守備する館に長く踏みとどまり、春、草が伸びて、人々を(略奪という)愚行に誘うとき、平静不動の姿勢を保った⁴⁾。
- 7- (いかなる部族も) 我らより首長や首長の子らが多くはないし、また、約束したことを実行するに値する部族はいない。
- 8- 種ラクダのような偉大な指導者が、我らの地位を昔の高所に昇らせた⁵⁾。そこにおいては、栄光が他に移ることは拒絶される。
- 9- 戦いの(恐怖の)朝、突如、ラクダの群れが水場へと駆け下り、弱って惨めな敵を踏み潰したとき、我らは敵をさえぎり、我らのラクダも無事であった⁶⁾。
- 10- (我らが) 戦いの喧騒の中、威力を示し、強打を繰り返すと、困惑した敵はだれかれ選ばず助けを求めた。

1) アルジャウナーニ al-Jawnāni はアルバフラインの村。

2) アッダフル al-Dakhūl とハウマル Hawmal は、いずれもイムル・アルカイスのムアッラカ冒頭に登場する地名で、上カシム地方のアサド族の牧草地の一部。

3) 野牛の描写がイムル・アルカイスのムアッラカ 64 行「牝牛らは裾の長い衣服をまとったダワールの乙女のように」とよく似ている。

4) 春、草や水が足りてくると、略奪戦をよくやったようだが、詩人はこれを愚行としている。

5) qurūm (単数 qarm) 「種ラクダ」。これは「偉大な指導者」の意味にも使われる。

6) シウブ・ジャバラにおいて、ラクダの群れで敵を踏み潰した作戦に触れている。al-wird は水場に向かうラクダのこと。

- 11- 勝利を得た我らは、ハージブの母が⁷⁾、夜通し、子を失った女が泣くのに答えて泣くままにしておいた。
- 12- (我らは) ガンム族の軍勢にフバーラで⁸⁾、朝日の出と共に、朝の苦杯を飲ませ、急ぎ死に追いやった。
- 13- (我らが用いたのは) すべて、スライジの名刀で⁹⁾、刀身は鍛冶屋が研ぎ、刃は薄く、勢い切り口は広がるままである。
- 14- また、ウズラ族であるが、戦いは彼らをその胸の下に押さえつけ、カルブ族に対しては戦いは、その首と胸の下に彼らを圧した¹⁰⁾。

7) ハージブの母 ʾUmm Hājib とは、タミーム系のダーリム族の指導者ハージブ Hājib とラキート Laqīt 兄弟の母。

8) Ḥubāla は Hubāla とも読まれる。フバーラの日 Yawm Ḥubāla およびガンム Ḡhamm 族については詳細不明。ガンムは偶像神の名として知られている。なお、略奪戦は朝に行われるのが常であった。

9) スライジュ Surayj は刀工の名、または、地名。〔校正者注：この行はカイロ版からの追加。〕

10) 戦いをラクダが膝を折って座るのに比した表現。アブスとウズラおよびカルブとの戦いについての情報は、ない。ウズラはアサドを中においてアブスより北に住み、カルブもアサドとタイイを中において、アブスより北を本拠としていた。

— (122) バシャーマ・ブヌ・アルガディール —

بَشَامَةُ بْنُ الْغَدِيرِ

まえがき

この詩人については No. 10 および No. 12 で紹介した。アルハーリス・ブヌ・アルフマームを長とするサフム家は、兄弟関係にあったシルマー門との戦いに勝った。しかし、時の移り変わりにより立場が逆転することもあり得るので、親族は寛大に扱えと忠告している。カーミル調、17 行。

(122) テキスト

وَقَالَ بَشَامَةُ بْنُ الْغَدِيرِ

- | | |
|--|--|
| بِالدَّوْمِ بَيْنَ بُحَارَ فَالشَّرْعِ | ١- لِمَنِ الدِّيَارُ عَقَوْنَ بِالْجَزْعِ |
| بَعْدَ الْأَنَيْسِ عَقَوْنَهَا سَبْعَ | ٢- دَرَسْتُ وَقَدْ بَقِيَتْ عَلَى حِجَجِ |
| دَارَتْ قَوَاعِدُهَا عَلَى الرَّبْعِ | ٣- إِلَّا بَقَايَا حَيَمَةٍ دَرَسَتْ |
| جَالَتْ شُؤُونُ الرَّأْسِ بِالدَّمْعِ | ٤- فَوَقَفْتُ فِي دَارِ الْجَمِيعِ وَقَدْ |
| تَجَرَّى جَدَاوُلُهُ عَلَى الزَّرْعِ | ٥- كَعُرُوضٍ فَيَاضٍ عَلَى فَلَجِ |
| عَوَجَ اللَّبَانِ كِمَطَرِيقِ النَّبْعِ | ٦- فَوَقَفْتُ فِيهَا كَيَ أُسَائِلَهَا |
| بِرَزْفِيفٍ بَيْنَ الْمَشْيِ وَالْوَضْعِ | ٧- أَنْضِي الرِّكَابَ عَلَى مَكَارِهَا |
| فَرَعَاءَ بَيْنَ نَقَانِقٍ قُرْعِ | ٨- بِرَزْفِيفٍ نَقْنَقَةٍ مُصَلَّمَةٍ |
| صَنَعَ لِطُولِ السَّنِّ وَالْوَقْعِ | ٩- وَبَقَاءِ مَطَرُورٍ تَحْيَرُهُ |
| فَلَقْتُ مَحَالَتُهُ مِنْ النَّزْعِ | ١٠- وَيَدَيَّ أَصَمَّ مُبَادِرٍ نَهْلًا |
| مِنْهَا صَبِيحَةَ لَيْلَةِ الرَّبْعِ | ١١- مِنْ جَمٍّ بِئْرٍ كَانَ فُرْصَتُهُ |
| تُخْطِئُ يَدَاهُ يَمُدُّ بِالضَّبْعِ | ١٢- فَأَقَامَ هُوَذْلَةَ الرِّشَاءِ وَإِنْ |
| فِيكُمْ مِنَ الْحَدَثَانِ مِنْ بَدْعِ | ١٣- أَبْلَغَ بَنِي سَهْمٍ لَدَيْكَ فَهَلْ |
| حَصَلَتْ حَصَاةُ أَخٍ لَهُ يُرْعِي | ١٤- أَمْ هَلْ تَرَوْنَ الْيَوْمَ مِنْ أَحَدٍ |
| لَاكُمْ فَكَانَ كَشَحْمَةِ الْقَلْعِ | ١٥- فَلَيْنَ ظَفِرْتُمْ بِالْخِصَامِ لِمَوْ |
| وَقَعْدْتُمْ لِلرَّيْحِ فِي رَجْعِ | ١٦- وَبَدَأْتُمْ لِلنَّاسِ سُنَّتَهَا |
| لَا تَخْلُطُوا الْإِعْطَاءَ بِالْمَنْعِ | ١٧- لَتَلَاوُمُنَّ عَلَى الْمَوَاطِنِ أَنْ |

(122) 訳

- 1- ブハールとアッシルウに挟まれたアッダウムの溪谷の曲がり角で¹⁾、跡形の消えた住居は、一体、誰のものであったか。
- 2- 跡形は消えてしまった。私の恋人が住んでいた跡は7年間残っていたが、その後消えてしまった。
- 3- 住居の跡は、小屋の跡以外すべて消えた²⁾。屋敷はその輪郭を表す支柱がぐると並んで立っていた。
- 4- 私は一族すべてが皆集った館の跡に立ち止まったが、(頭の) 涙腺から涙がどっとあふれた。
- 5- (涙の流れる様は) まるで、大河の土手にあふれ、川となって畑に流れ込む洪水の広がりのおようであった³⁾。
- 6- 私は住居跡を尋ねるために、胸が広くナブウ木の棒のようによく引き締まった馬をそこに留まらせた⁴⁾。
- 7- ラクダたちは嫌がってはいたが、私は並足と早がけの間の速さで走らせて、ラクダを疲れさせてしまった。
- 8- すなわち、頭の先がはげたダチョウのなかで、耳がそがれた雌ダチョウが迅速に走るように (ラクダを駆けさせた)。
- 9- このラクダには、熟練した刀工が長期にわたって研いで、磨き上げた上で選びぬいた鋭利な剣のような、持続力が備わっていた。
- 10- 耳が聞こえない男の両手は何に気を取られることもなく、喉の渴いたラクダのために水を汲み上げ、井戸の滑車は彼がバケツを引き上げるたびに揺れた (ラクダはこの男の手のように休まず進んだ) ⁵⁾。
- 11- 彼は大量の井戸水を汲み上げた。次 (に水を汲み上げてラクダに飲ませるの) は三日目の夜が明けた朝である。
- 12- 彼はバケツのロープの揺れを正す。たとえ、彼の手先が誤っても、上腕を使って正すのである。
- 13- お前の家に留まっている、サフム家の子らに伝えよ。“お前達には運命の転変に処する新たな手立てがあるのか。”
- 14- “お前達は今日、かつて、兄弟の恩恵を受けていた者が、これを授ける者になったのを見るか”。
- 15- たとえ、お前達が従兄弟との戦いに勝ったとしても、そのうえ、従兄弟達が皮袋の中の脂身のようにな (り身動き出来なくな) ったとしても、
- 16- また、お前達は人々に (彼らの扱いにつき) 初めて慣例を示すことになり、風向き

1) アッダウム *ad-dawm* 「野生のナツメヤシの樹」、ここでは地名。

2) *khayma* は「テント」の意味で用いられるようになったが、以前は、木の支柱を立て椰子や *thumām* 「キビの茎」などで屋根を葺き、側面を長い草などで塞いだ小屋を表した。敷地に支柱をぐると立て、中央に支柱を立て、まわりにロープや杭を設けて、毛皮などで覆ったテントは *bayt* と呼ばれた。

3) *ka-ʿurūd* 「広がりのおよう」と訳した。他に、*ka-ghurūb* 「水袋のように」、*ka-firād* 「土手を破る水のように」などの伝承もあるが、下の句とつながらない。

4) ここで突如、馬のことが述べられる。前後の関係から、脱落部分があるかもしれない。

5) この詩人は No. 10, 26-27 行でラクダの前脚がすばやいのを、おぼれた者が動かす手に比している。ここではそれを水を汲み上げる男の手に比している。

- が変わる所に座ることになれば、
- 17- きっと、人々が集う場所で、お前達は硬軟織り交ぜた手立てを講じなかったとして、相次いで非難されるであろう⁶⁾。

6) 15-16 行は条件節、17 行が帰結節。mawlā「従兄弟」とはシルマー門をさす (No. 12「まえがき」参照)。敵対した同族に寛大な扱いをするよう勧告したもの。

— (123) アムル・ブヌ・アルアフタム —

عَمْرُو بْنُ الْأَهْتَمِ

まえがき

この詩人は No. 23 に既出。この詩においては、恋人との離別の悲しみを詠んだ序詞のあと、息子のリブイー (Rib'īy) への訓戒を述べている (5-17 行)。ついで、旅の苦難や祖先および父が対立していた部族間を和解させたこと、などを誇っている。ワーフィル調、28 行。

(123) テキスト

وَقَالَ عَمْرُو بْنُ الْأَهْتَمِ

- | | |
|--|---|
| وَقَدْ بَانَتْ بِرُهْنِكُمْ الْخُدُورُ | ١- أَجْدَكَ لَا ثَلِيمٌ وَلَا تَزُورُ |
| كَوَانِسَ حُسْرًا عَنْهَا الشُّتُورُ | ٢- كَأَنَّ عَلَى الْجَمَالِ نَعَاجَ قَوِّ |
| بِهِنَّ جُلَالَةٌ أَجْدُ عَسِيرُ | ٣- وَأَبْكَارٌ نَوَاعِمُ الْحَقَّتْنِي |
| أَذِنَ إِلَى الْحَدِيثِ فَهِنَّ صُورُ | ٤- فَلَمَّا أَنْ تَسَايَرْنَا قَلِيلًا |
| إِذَا حَزَبْتَ عَشِيرَتَكَ الْأُمُورُ | ٥- لَقَدْ أَوْصَيْتُ رُبْعِي بَنَ عَمْرُو |
| وَحِفْظُ السُّورَةِ الْعُلْيَا كَبِيرُ | ٦- بِأَنْ لَا تُفْسِدَنَّ مَا قَدْ سَعَيْنَا |
| وَمَصْدَرُ غَيْبِهِ كَرَمٌ وَخَيْرُ | ٧- وَإِنَّ الْمَجْدَ أَوَّلُهُ وَغُورُ |
| تَجُودَ بِمَا يَضُنُّ بِهِ الضَّمِيرُ | ٨- وَإِنَّكَ لَنْ تَنَالَ الْمَجْدَ حَتَّى |
| يَهَابُ رُكُوبَهَا الْوَرَعُ الدُّثُورُ | ٩- بِنَفْسِكَ أَوْ بِمَالِكَ فِي أُمُورِ |
| إِذَا أَمْسَى وَرَاءَ الْبَيْتِ كُورُ | ١٠- وَجَارِي لَا تُهَيِّنْهُ وَضَيْفِي |
| عَوَانٌ لَا يُنْهِنُهَا الْقُتُورُ | ١١- يُوُوبُ إِلَيْكَ أَشْعَثَ جَرَفَتُهُ |
| عَلَيْكَ فَإِنَّ مَنْطِقَهُ يَسِيرُ | ١٢- أَصْبَهُ بِالْكَرَامَةِ وَاحْتَفِظْهُ |
| بَدَا لِي إِنِّي رَجُلٌ بَصِيرُ | ١٣- وَإِنَّ مِنَ الصَّدِيقِ عَلَيْكَ ضِعْفًا |
| وَمَا تُخْفِي مِنَ الْحَسَكِ الصُّدُورُ | ١٤- بِأَذْوَاءِ الرِّجَالِ إِذَا التَّقَيْنَا |
| إِلَى الْعُلْيَا وَأَنْتَ بِهَا جَدِيرُ | ١٥- فَإِنْ رَفَعُوا الْأَعِنَّةَ فَارْفَعْنَهَا |
| وَجَاهِدْهُمْ إِذَا حَمِيَ الْفَتِيرُ | ١٦- وَإِنْ جَهَدُوا عَلَيْكَ فَلَا تَهَبْهُمْ |
| وَإِنْ جَارُوا فَجُرْ حَتَّى يَصِيرُوا | ١٧- فَإِنْ قَصَدُوا لِمُرِّ الْحَقِّ فَاقْصِدْ |
| عُيُونُهُمْ مِنَ الْبَغْضَاءِ غُورُ | ١٨- وَقَوْمٌ يَنْظُرُونَ إِلَيَّ شَزْرًا |
| أَصَاحَ الْقَوْمُ وَاسْتَمِعَ النَّقِيرُ | ١٩- قَصَدْتُ لَهُمْ بِمُخْزِيَةٍ إِذَا مَا |
| أَعْرَسَ فِيهِ تَسْفَعُنِي الْحُرُورُ | ٢٠- وَكَأَنَّ مِنْ مَصِيفٍ لَا تَرَانِي |

- ٢١- عَلَى أَقْتَادٍ ذِغْلَبَةٍ إِذَا مَا
 ٢٢- وَلَوْ أَنِّي أَشَاءُ كُنْتُ جِسْمِي
 ٢٣- وَلَا عَبْنِي عَلَى الْأَنْمَاطِ لُعْسُ
 ٢٤- وَلَكِنِّي إِلَى تَرَكَاتٍ قَوْمِ
 ٢٥- سُمِّي وَالْأَشَدُّ فَشَرَّفَانِي
 ٢٦- تَمِيمٌ يَوْمَ هَمَّتْ أَنْ تَفَانِي
 ٢٧- بِوَادٍ مِنْ ضَرِيَّةَ كَانَ فِيهِ
 ٢٨- فَأَصْلَحَ بَيْنَهَا فِي الْحَرْبِ مِمَّا
- أَدِثْتُ مُيْتَتْ أُخْرَى حَسِيرُ
 وَعَادَانِي شِوَاءٌ أَوْ قَدِيرُ
 عَلَيْنَهُنَّ الْمَجَاسِدُ وَالْحَرِيرُ
 هُمُ الرُّؤَسَاءُ وَالنَّبَلُ الْبُحُورُ
 وَعَلَى الْأَهْتَمِ الْمُوفِي الْمُجِيرُ
 وَدَانِي بَيْنَ جَمْعِيهَا الْمَسِيرُ
 لَهُ يَوْمٌ كَوَاكِبُهُ تَسِيرُ
 أَلَمْ بِهَا أَحُو ثِقَةً جَسُورُ

(123) 訳

- 1- (かつての恋人の住居跡に) お前が近寄り訪ねないのは本心でのことか。覆いに包まれた婦人用の籠を乗せたラクダはお前達の心を質草として預かり、旅立ってしまった。
- 2- 雄ラクダの背にはカウウの野牛のように（大きな目をした婦人たちが）隠れ処に入り込むように乗っていたが、籠の垂れ幕が足りず（一部が見えていた）。
- 3- 優美な乙女たちのところに、強大で、訓練半ばの雌ラクダが私を乗せて近寄せた。
- 4- 我らが、一行と並んで少し進んだとき、彼女らは体を傾けて、我らの話に聞き耳を立てた。
- 5- 私はかつて、倅のリブイー・ブヌ・アムルに訓戒しておいた。“お前の一族に突然難事が降りかかったなら、
- 6- 我らが築き上げた栄光を台無しにしてはならぬ。栄光を保持することは大事である。
- 7- 栄光を築き上げることは、最初は荒地のように難事である。これを実現するためには、寛容と徳行によらねばならぬ。
- 8- お前は、心が惜しむものを気前良く与えなければ、決して栄光に浴することは望めない。
- 9- お前は、小心で怠惰な男が手を染めるのを恐れるような問題に、生命と財産を賭して取り組み。
- 10- テントの裏に鞍が下ろされるようなときには、(お前に) 庇護を求める者やお客を軽んじてはならない¹⁾。
- 11- 彼は夜、髪を乱し、和らぐこともない相次ぐ災難に会い無一文の姿で、お前を訪ねて来るであろう。
- 12- お前は彼をよくもてなし、身をていして彼を保護せよ。彼の言葉は広く行き渡るのだ。
- 13- 友人がお前を憎んでいる姿が、私には良く見える。まことに、私は目が良く効く男である。

1) 「テントの裏にラクダの鞍が下ろされる」とは、庇護される者が飢餓状態であってももてなされないような、困難なときのこと。

- 14- すなわち、(私には) 出会えば、男達の欠点も²⁾胸の中に隠している憎悪の念も良く見える。
- 15- 彼らが(馬をけしかけるために) 手綱をあげたなら、お前も手綱をあげ、一層高尚なものを求めよ。お前にはそれが出来る。
- 16- もし、彼らがお前を圧迫するなら、彼らを恐れず、鎖帷子の鉾の頭が熱くなるまで彼らと戦え³⁾。
- 17- 彼らが正義の苦難に立ち向かうなら、お前もそのように志せ。彼らが正道を踏み外せば、彼らが正道に戻るまで、おまえも正道を踏み外せ。
- 18- なんと多くの民が、私を横目で見たことであろうか。彼らの目は憎しみのあまり盲目であった。
- 19- 私は彼らに辱めの詩を贈り、人々はこれを聞いた。いずれ、(その反応として) 災難の響きが聞かれるだろう⁴⁾。
- 20- なんと多くの夏営地で、熱風に焦がされ、夜半になっても、お前が見たとおり、私は休息することが出来なかった。
- 21- すなわち、私は駿足の雌ラクダの木鞍に乗っていたのであるが、これが疲れたので、代わりのラクダが私を乗せて軽快に進んだのである。
- 22- もし、私が望めば、(旅には出ずに) わが身をテントのなかに隠し、朝食には焼肉と煮た肉が供されたであろうに⁵⁾。
- 23- そして、絨毯の上では深紅な唇の乙女らがサフランで染めた衣装や絹をまとして私と戯れたであろうに⁶⁾。
- 24- だが、私はある人々の遺産を引き継いだ者である。彼らは首長であり、気高く海のように、寛大であった。
- 25- すなわち、(私の祖父の) スマユと(曾祖父の) アルアシャッドは私に栄誉を与えた。また(私の父の) アルアフタムは、誠実で人々をよく庇護し(私の名誉を高め)た⁷⁾。
- 26- タミーム族が敵と生死の戦いをもくろんだ日、敵味方双方の距離は接近した⁸⁾。
- 27- ダリーヤの溪谷で彼(私の父)は、昼間に星を見る日を迎えた⁹⁾。
- 28- 信頼が置ける大胆な味方(である私の父)は、彼らの戦いがもたらす厄災を防ぎ、彼らを平和裏に和解させた。

2) dawa-n (複数 ʾadwā) 「病気」は、精神的なケースも表す。No. 119, 8 行を参照。

3) 解説では「鉾の頭が太陽で熱くなるとき」となっているが、「激戦で熱くなる」とした。

4) naqīr 「災難」と解説されている。詩人が放った中傷詩の効果の音を「災難」と捉えたか。

5) 下の句の ʾaw は wa の意味で用いられている。コーラン 37章 147 節: wa-ʾarsalnā-hu ʾilā miʾati ʾalfin ʾaw yazīdūna 「我らは彼を10万人余の民のもとへ遣わした」。

6) 女性の唇が深紅であるのが魅力的とされていた。

7) Lyall 版 22 行では wa-jadd-ī l-ʾAhtamu 「我が祖父アルアフタム」となっているが、明らかに間違っている。これに対応するカイロ版 25 行への解説にあるように、アルアフタムは詩人の父(シナーン・ブヌ・スマイイ Sinān b. Sumayy) の綽名である。

8) 対立していたのはタミーム系の2グループである。一方はサアド・ブヌ・ザイド・マナートとアッリバーブ連合軍で、他方はハンザラとアムル・ブヌ・タミーム連合軍。前者はダリーヤ Ḍarīya に、後者はアンニサルに集結していた。アルアフタムはサアド側に立って和解を指導した。

9) 戦闘が激化すると土煙が上がって昼間が夜ようになり、星が見える、と表現している。No. 12, 4 行を参照。

— (124) アウフ・ブヌ・アティーヤ —

عَوْفُ بْنُ عَطِيَّةَ

まえがき

この詩人については既に同人の詩 No. 94 と No. 95 で紹介した。この詩においてはまず、かつての恋人の住まいが今や廃墟となり、野獣が徘徊するようになった、と詠んでいる。次いで飲酒に触れ、年を取ったが、飢餓期に気前よく振舞うことを自慢している。さらに、自分の馬が優れていることを数え上げ、最後には、自部族のアウフ・ブヌ・カアブとアッリバーブの栄光を讃えている。この詩人は No. 94 で、ラフハラーンの戦い（569年ごろ）でアーミル・ブヌ・サアサア連合軍に敗れ、その5-6年後、アンニサルルの戦いでも敗れたことに言及している。ムタカーリブ調、42行。

(124) テキスト

وَقَالَ عَوْفُ بْنُ عَطِيَّةَ بْنِ الْخَرِجِ الرَّبَابِيُّ مِنْ تَيْمِ الرَّبَابِ

- | | |
|--|--|
| بِحَيْثُ الشَّقِيقِ خَلَاءً قَفَارَا | ١- أَمِنْ آلِ مَيِّ عَرَفْتَ الدَّيَارَا |
| وَكَانَ بِهَا قَبْلُ حَيٍّ فَسَارَا | ٢- تَبَدَّلَتْ الْوُحْشُ مِنْ أَهْلِهَا |
| جَ الْبِسْنِ مِنْ رَازِقِي شِعَارَا | ٣- كَأَنَّ الطَّبَاءَ بِهَا وَالنَّعَا |
| لِسَائِلِهَا الْقَوْلُ إِلَّا سَرَارَا | ٤- وَقَفْتُ بِهَا أَصْلًا مَا تُبِينُ |
| تَصَعَّدُ بِالْمَرْءِ صِرْفًا عُقَارَا | ٥- كَأَنِّي اضْطَبَحْتُ عُقَارِيَّةَ |
| يَفُضُّ الْمُسَابِيَّ عَنْهَا الْجَرَارَا | ٦- سَلَافَةَ صَهْبَاءَ مَاذِيَّةَ |
| أَشْيَبًا قَدِيمًا وَحَلْمًا مُعَارَا | ٧- وَقَالَتْ كُبَيْشَةُ مِنْ جَهْلِهَا |
| إِذَا اسْتَرْوَحَ الْمُرْضِعَاتُ الْفُتَارَا | ٨- فَمَا زَادَنِي الشَّيْبُ إِلَّا نَدَى |
| حَيَاءً وَأَفْعَلُ فِيهِ الْيَسَارَا | ٩- أُحْيِي الْخَلِيلَ وَأُعْطِي الْجَزِيلَ |
| تِ وَالْجَارُ مُمْتَنِعٌ حَيْثُ صَارَا | ١٠- وَأَمْنَعُ جَارِي مِنَ الْمُجْحَفَا |
| تَرُدُّ عَلَى سَائِسِيهَا الْحِمَارَا | ١١- وَأَعْدَدْتُ لِلْحَرْبِ مَلْبُونَةً |
| لَمْ يَدْعِ الصُّنْعُ فِيهَا عُوَارَا | ١٢- كُمَيْتًا كَحَاشِيَةِ الْأَتْحَمِي |
| إِذَا جَرَّتِ الْحَيْلُ أَنْ يُسْتَطَارَا | ١٣- رُوعَ الْفُؤَادِ يَكَادُ الْعَنِيفُ |
| طِ فَضَضَ عَنْهَا الْبُنَاءُ الشَّجَارَا | ١٤- لَهَا شَعْبٌ كَأَيَادِ الْعَبِيدِ |
| فَلَا الْعَظْمُ وَاهٍ وَلَا الْعِرْقُ فَارَا | ١٥- لَهَا رُسْعٌ مُكْرَبٌ أَيْدٍ |
| دِ يَتَّخِذُ الْقَارُ فِيهِ مَعَارَا | ١٦- لَهَا حَافِرٌ مِثْلُ قَعْبِ الْوَلِيدِ |

فِ مَدَدَ فِيهِ الْبَنَاءُ الْحَتَارَا
وَأَبْلَغُ بَنِي دَارِمٍ وَالْجَمَارَا
طَحَا بِهِمُ الْأَمْرُ ثُمَّ اسْتَدَارَا
وَرَاعِي حَنِيفَةَ يَزْعَى الصَّفَارَا
يُرْعِي الْحَلَاءَ وَنَبْغِي الْعِوَارَا
بِ أَمْرًا قَوِيًّا وَجَمْعًا كَثَارَا
وَتَبْلَغُ مِنْ ذَاكَ أَمْرًا قَرَارَا
لَزَادَكُمْ الْقَوْمُ حَزِينًا وَعَارَا
شَبَبْنَا لِحَرْبٍ بَعْلِيَاءَ نَارَا
وَلَا نَتَّقِي طَائِرًا حَيْثُ طَارَا
عَلَى كُلِّ حَالٍ نُلَاقِي الْيَسَارَا
يَضَعْنَ بَبْطُنِ الرُّشَاءِ الْمَهَارَا
كَمَا شَقَّقَ الْهَاجِرِيُّ الدِّبَارَا
فَسِرْنَا ثَلَاثًا فَأَبْنَا الْجِفَارَا
سِ أَدْنَتْ عَلَى حَاجِبَيْهَا الْخِمَارَا
فَأَوْلَى فَرَارَةً أَوْلَى فَرَارَا
مِنَ الشَّرِّ يَوْمًا مُمْرًا مُعَارَا
وَحَيَّ كِلَابٍ أَبَارَتْ بَوَارَا
أَبَى لَا يُحَاوِلُ إِلَّا سَوَارَا
وَلَيْتَ ابْنُ كُوزٍ رَأْنَا نَهَارَا
أَوْ الْمُسْتَوَى إِذْ عَلَوْنَ الْيَسَارَا
فَكَانَ ابْنُ كُوزٍ مَهَاءَ نَوَارَا
سُوءَاءَ سَعْدٍ وَنُصْرًا جَهَارَا
وَعَنْمًا فَكَانَتْ لِعَنْمٍ دَمَارَا
كَمَا أَتْبَعَ الْعَرُّ مِلْحًا وَقَارَا
أَرَامِلَ شَتَّى وَرَجَلَى حِرَارَا

١٧- لَهَا كَفَلٌ مِثْلُ مَثْنِ الطَّرَا
١٨- فَأَبْلَغُ رِيَاحًا عَلَى نَائِيهَا
١٩- وَأَبْلَغُ قَبَائِلٍ لَمْ يَشْهَدُوا
٢٠- غَزَوْا الْعَدُوَّ بِأَبْيَاتِنَا
٢١- فَشَتَّانَ مُخْتَلِفٌ بَالُنَا
٢٢- بِعُوفِ بْنِ كَعْبٍ وَجَمْعِ الرِّبَا
٢٣- فَيَا طَعْنَةً مَا تَسُوهُ الْعَدُوَّ
٢٤- فَلَوْلَا عُلالَةُ أَفْرَاسِنَا
٢٥- إِذَا مَا اجْتَبَيْنَا جَبَى مِنْهَلٍ
٢٦- نَوْمُ الْبِلَادِ لِحُبِّ اللَّقَاءِ
٢٧- سَنِحًا وَلَا جَارِيًا بَارِحًا
٢٨- نَقُودُ الْحِيَادِ بِأَرْسَانِهَا
٢٩- تَشْقُ الْحَزَابِيَّ سُلَافُنَا
٣٠- شَرِبْنَا بِحَوَاءٍ فِي نَاجِرٍ
٣١- وَجَلَّلَنَّا دَمْحًا قِنَاعَ الْعَرُو
٣٢- فَكَادَتْ فَرَارَةٌ تَصْلَى بِنَا
٣٣- وَلَوْ أَدْرَكْتَهُمْ أَمَرْتُ لَهُمْ
٣٤- أَبْرَنَ نُمَيْرًا وَحَيَّ الْحَرِيشِ
٣٥- وَكُنَّا بِهَا أَسَدًا زَائِرًا
٣٦- وَفَرَّ ابْنُ كُوزٍ بِأَذْوَادِهِ
٣٧- بِجُمْرَانَ أَوْ بِقَفَا نَاعَتَيْنِ
٣٨- وَلَكِنَّهُ لَجَّ فِي رَوْعِهِ
٣٩- وَلَكِنَّهَا لَقِيَتْ غُدُوَّةً
٤٠- وَحَيَّ سُؤْيِدٍ فَمَا أَخْطَأَتْ
٤١- فَكُلُّ قَبَائِلِهِمْ أُتْبِعَتْ
٤٢- بِكُلِّ مَكَانٍ تَرَى مِنْهُمْ

(124) 訳

1- アッシャキークの側にあったマイイー家の住まいを君は知っているか¹⁾。今や、そ

1) アッシャキーク al-Shaqīq はバヌー・アシード・ブヌ・アムル・ブヌ・タミーム Banū ʿAsīd b. ʿAmr b. Tamīm の水場を表す固有名詞、アルカシーブ al-Kathīb との伝承もある。bi-ḥaythu に対しては bi-janbi との伝承が妥当。

- こには人影もなく荒れ果てている。
- 2- 住居跡は、住民を野獣と取り替えてしまった。かつて、そこには一家のテントが建っていたが、彼らは旅立ってしまった²⁾。
 - 3- そのあたりを徘徊しているガゼルや野牛は³⁾、まるで薄くて美しいラーイ産の白い下着を着せられているようだ。
 - 4- 私は日没後にこの廃墟跡に立ち尽くしたが、廃墟跡は尋ねる者に秘するかのように、明確には答えなかった。
 - 5- あたかも、私は年代物のぶとう酒を朝飲んだかのようにであった⁴⁾。それは人を地面から浮きあがらせるような、混ざりけのない古酒であった。
 - 6- それは白みがかった、喉越しのよい最上のぶどう酒で⁵⁾、買い手は壺から（酒を出すために）その栓を開けるのである。
 - 7- クバイシャは愚かゆえ、“あなたの頭は早くから白髪となり、知恵も誰かに貸してしまったわ”と言った。
 - 8- 否、白髪は私を一層、気前よくした。乳飲み子を抱えた母親が（飢餓に苦しみ）焼肉の匂いを求めるときに当たっては（格別にそうだ）。
 - 9- 私は貧困な者を生かし⁶⁾、はにかみながら、ふんだんに与える。白髪になってから、かえって楽々とあたえる。
 - 10- 私は庇護を求める者をあらゆる災難から守る。私に庇護された者はどこにあっても安全に守られる。
 - 11- 私は戦いに備えて、ミルクで育てた雌馬を控えさせた。この馬は野生のロバに走り勝ち、二名の馬丁たちのところへロバを追い戻す⁷⁾。
 - 12- それはアトハム産の上衣の縁取りのような栗毛の馬で⁸⁾、非の打ち所のない調教を受けていた。
 - 13- それは血気盛んな馬で、駆け出すと下手な乗り手の場合には振り落とされそうになる⁹⁾。
 - 14- この馬の四肢は¹⁰⁾、大工が乗り籠の木枠をはずした鞍の前輪のように、すらりとしていた。
 - 15- 馬の足首は強く引き締まっており、(脚の)骨は弱くなく、血管は膨らんでいない¹¹⁾。
 - 16- また、その蹄は少年の茶碗のようで、ネズミが穴倉にするような形をしている¹²⁾。
 - 17- 馬の臀部は、大工が紐を伸ばして固定した皮テントの背面のように、はちきれんば

2) カイロ版で、他写本から追加された1行。

3) ni'āj (na'ja「雌羊」の複数)は、野牛と解説されている。カモシカの一種オリックスと思われる。

4) ʿuqārīyatan の代わりに *sukhāmīyatan*「柔らかな」との伝承がある。上の句と下の句で ʿuqār の同語反復は不自然である。

5) mādhīya「喉越しがよい」と解説にあるが、ペルシャの Media 産かもしれない。

6) al-khalīl は「貧困な者」。

7) sā'isay-hā (双数、Lyall 版) は sā'isī-hā (複数、カイロ版) で読まれることもある。

8) アルアトハム al-ʾAṭham はアルヤマンの地名で、ここに職人が定住して織物を産し、中央アラビアに流通させていた。

9) カイロ版で、他写本から追加された1行。

10) shuʿb (shuʿba の複数) は四肢と説明されているが、ほかに「首、背筋」などとする説もある。

11) 血管が膨らんでいると、脚が弱いとされていた。

12) 馬の蹄は、円錐形のものがよいとされていた。

- かりに肉が盛り上がり、滑らかである。
- 18- 遠隔地にいるリヤーフに、また、バヌー・ダーリムおよびアルジマールに伝えよ¹³⁾。
- 19- また、戦場に居合わせなかった諸部族にも伝えよ。“事件は彼らを当惑させ、彼らは目まいに襲われた。
- 20- 我らは、ハニーファ族の羊飼いが黄色の麦を羊に食べさせているとき、敵を詩で攻撃した¹⁴⁾。
- 21- 我々の思いは、なんと大きく隔たっていたことだろう。彼は新鮮な草を食べさせようとし、我らは戦鬪を望んでいたのである。
- 22- すなわち、我らはアウフ・ブヌ・カアブとアルリバーブの、強力で多数の軍勢でもって戦おうとしていた。
- 23- おお、敵を悩ます槍の一突きよ、それにより、究極の目的を達成するのである。
- 24- 我らの軍馬の、疲れを知らぬ襲撃が無かったなら¹⁵⁾、人々はあなた方をますます蔑み、辱めたことだろう。
- 25- 我らは水場で水を飲むと、戦火をあげるため高台へと登って行った。
- 26- 我らは遭遇戦を好んで大地を直進する。(占いの) 鳥がどちらに飛ぼうと、意に介さない。
- 27- すなわち、鳥が左から飛んでこようが、右から飛んでこようが¹⁶⁾、我らは気楽に受け止めていた。
- 28- 我らはつなぎ綱で駿馬を御しながら進むが、雌馬は(苦しみのため)子馬をアッリシャーウの谷間で生み落としてしまう¹⁷⁾。
- 29- 我らの軍勢の前衛は、固い地面に蹄の跡を残した。それはまるで、ハジャールの農民が畑地に掘った溝のような跡であった¹⁸⁾。
- 30- 我らは酷暑の日、ハウワーウで水を飲み、三日進んだ後、井戸のところに帰った。
- 31- (我らの) 騎馬軍はダムフ山を¹⁹⁾、花嫁がベールを両眉の上まで下げるように、覆いつくした。
- 32- ファザーラ族は、我らによりまさに消滅しようとしていた。災いあれ、ファザーラ族よ。
- 33- もしもわが軍勢が彼らに追いついていたなら、彼らに災厄の強い綱を撚る日としていただろう。
- 34- (また、我らの軍勢は)ヌマイル族もアルハリーシュ族もキララブ族もことごとく滅

13) リヤーフ Riyāḥ は Banū Riyāḥ b. Yarbū^o のことで、タミーム族の騎士ウタイバ・ブヌ・アルハーリス・ブヌ・シハーブ ‘Uṭayba b. al-Ḥārith b. Shihāb の縁者であった。アルジマール al-Jimār とはダッバ・ブヌ・ウッド、アブス・ブヌ・バギード、アルハーリス・ブヌ・カアブの3家族のことで、彼らの母は、アルハスナーウ・ピント・ワバラ al-Ḥasnā^o bint Waraba。なお、リヤーフとダーリムはいずれもタミーム系。

14) カイロ版により追加された1行。

15) ‘ulāla 「一飲みした後また飲む」、転じて「一走りした後また走る、疲れも見せず活躍する」。

16) sanīḥ または sānīḥ は、ヒジャーズの住民では「鳥が右から左に飛ぶ」、ネジドの住民では逆に「左から右に飛ぶ」の意味で、sanīḥ の反対語は bārīḥ。両住民とも左から右に飛ぶのを吉兆とみなしていた。つまり、ヒジャーズで吉は bārīḥ、ネジドの吉は sanīḥ。

17) アッリシャーウ al-Rishā^o (アッリシャーウ al-Rushā^o とともに) は地名。

18) ハジャール Hajar はアルバフラインの町で灌漑農業が行われ、ベルシャ人やアラム系の民が住んでいた。

19) ダムフ Damkh は山であるから、ここに大軍が集結したことになる。

- 亡させていただこう²⁰⁾。
- 35- 我らは軍勢のなかの咆哮するライオンであって、ひとえに獲物を襲撃するのみである。
- 36- クーズの倅は、ラクダ数頭を連れて逃げた²¹⁾。クーズの倅が昼間、我らと相まみえていれば良かったのに。
- 37- 彼にジュムラーンかナーイトゥーンの峰かアルムスタワー（平地）で会えば良かったのだが、（我らの軍勢はあいにく）アンニサル山に登っていた。
- 38- だが、彼は恐怖にかられて逃げた。クーズの倅は、獵師に追われて逃げていく牝牛のようであった。
- 39- しかし、我らの軍勢は、朝、アサド族のスワーアとナスルに正面から衝突した²²⁾。
- 40- スワイド族とも対決したが、わが方はたがわずこれを破った。また、ガンム族も破り、全滅した。
- 41- 彼らの各部族は、屈辱を癒す手当てを受けざるをえないはめに追い込まれた。ちょうど、疥癬の治療に、塩とタールの手当てをうけるように。
- 42- あらゆる所で、あなたは（夫が殺された）女たちすべてが嘆き、（ラクダを奪われた）男たちが悲しげに素足でうろつく姿を見るであろう。

20) アルハリーシュ *al-Harīsh* は、アーミル・ブヌ・サアサア系のムアーウィヤ・ブヌ・キラブ *Mu'āwiya b. Kilāb* 族の別名。なお、詩人が敵対部族に対して全滅といっているのは誇張表現である。

21) イブン・クーズ *Ibn Kūz* はアサド族の男と説明されている。

22) スワーア *Suwā'a* とナスル *Naṣr* はいずれも、アサド系の部族。

— (125) アルアスワド・ブヌ・ヤアフル —

الْأَسْوَدُ بْنُ يَغْفَرُ

まえがき

タミーム系ダーリム族の詩人で、No. 44 に既出。ラフム朝最後の王アンヌアマーン・アブー・カーブース（605年ごろ没）と同時代の人。詩人は視力が弱く、老いて殆ど失明した。序詞の部分で、かつての恋人が、気変わりし他の男を愛するようになったことに触れ、その原因として、彼女が詩人の白髪に気づいたことだとしているが（14 行）、これは詩人と同族の先輩詩人アルカマ No. 119, 9 行の文句を踏まえたものであろう。また、この詩の 6-9 行では、恋人の唾液をぶどう酒になぞらえているが、これもアルカマ No. 120, 39 行からの描写を踏襲したものと思われる。パシート調、11 行。

(125) テキスト

وَقَالَ الْأَسْوَدُ بْنُ يَغْفَرُ

- | | |
|---|--|
| بَعْدَ اثْتِلَافٍ وَحُبِّ كَانَ مَكْتُومًا | ١- قَدْ أَصْبَحَ الْحَبْلُ مِنْ أَسْمَاءٍ مَصْرُومًا |
| أَنْ لَنْ أَبِيتَ بِوَادِي الْحَسْفِ مَذْمُومًا | ٢- وَاسْتَبَدَلْتُ حُلَّةً مِنِّي وَقَدْ عَلِمْتُ |
| مِنْ خَيْرِ قَوْمِكَ مَوْجُودًا وَمَعْدُومًا | ٣- عَفُفٌ صَلِيبٌ إِذَا مَا جُلْبَةٌ أَرَمْتُ |
| بَعْدَ الشَّبَابِ وَكَانَ الشَّيْبُ مَسْئُومًا | ٤- لَمَّا رَأَتْ أَنَّ شَيْبَ الْمَرْءِ شَامِلُهُ |
| إِنَّ الشَّبَابَ الَّذِي يَغْلُو الْجَرَائِمَا | ٥- صَدَّتْ وَقَالَتْ أَرَى شَيْبًا تَفَرَّعَهُ |
| صِرْفًا تَحَيَّرَهَا الْحَانُونَ خُرْطُومًا | ٦- كَأَنَّ رِيْقَتَهَا بَعْدَ الْكَرَى اغْتَبَقْتُ |
| مُقَلَّدَ الْقَعْوِ وَالرَّيْحَانِ مَلْثُومًا | ٧- سُلَاقَةَ الدَّنِّ مَرْفُوعًا نَصَائِبُهُ |
| بِبَابِ أَقْنَانَ يَبْتَارُ السَّلَالِيْمَا | ٨- وَقَدْ ثَوَى نِصْفَ حَوْلٍ أَشْهُرًا جُدْدًا |
| يَرْشُو التَّجَارَ عَلَيْهَا وَالتَّرَاجِيْمَا | ٩- حَتَّى تَنَاولَهَا صَهْبَاءٌ صَافِيَةٌ |
| أَرْضًا يَحَارُ بِهَا الْهَادُونَ دَيْمُومًا | ١٠- وَسَمْحَةَ الْمَشْيِ شِمْلَالٍ قَطَعْتُ بِهَا |
| إِلَّا الضَّوَابِحَ وَالْأَصْدَاءَ وَالْبُومَا | ١١- مَهَامِهَا وَخُرُوفًا لَا أَنْيسَ بِهَا |

(125) 訳

- 1- アスマーウとの絆は、親しい付き合いと秘めた恋のあと、今や、断ち切られてしまった。
- 2- 彼女は、私が卑しめの谷で辱められて夜を過ごすような男ではないことを知りながら、私以外の男と親しくなった。
- 3- 旱魃が激しいとき、君の部族の貴人らの中で、故人も生者をもふくめて、私は最も

自制心に富み、忍耐強い男だ。

- 4- 彼女は青春が過ぎると、私の頭が白髪で覆われているのを見て一白髪は（女性に）嫌われるものだが一、
- 5- 目をそむけて言った。“お見かけしたところ、頭頂が白髪で覆われていますわ。若者だけが木の根から上にのびるものです¹⁾” と。
- 6- 眠ったあとの彼女の唾液は、酒屋が選り抜いた甕から封切りした、混じり気のないぶどう酒のような味わいであった。
- 7- 柱の上にあげられていた甕から、封切されたブドウ酒は水差しに入れられ、ヘンナとメボウキで取り巻かれ布で包まれていた。
- 8- 半年間、月を更新する間、（ぶどう酒の）甕はバーブ・アッファーン（の屋上で天日に晒されていたが）酒屋は階段を注意して登る²⁾。
- 9- やがて、彼はそのブドウ酒を手に入れた。それは白いブドウから作られた原酒で、商人や通訳を賄賂で買収したうえでのことである³⁾。
- 10- 私は軽快で駿足な多くのラクダに乗って、案内人も迷う、水も道しるべもない荒野を横断したものだ⁴⁾。
- 11- それは人影の無い荒地や草木が生い茂った平原で、聞こえるのは狐や梟の叫び声だけであった。

1) 「若者だけが・・・」この部分は諺。

2) 解説ではバーブ・アッファーン（bāb ʿaffān）は地名とされているが、アッファーンは酒屋の名前、バーブは酒蔵ととらえるほうが妥当なように思われる。酒の熟成を早めるために甕を屋上においたのであろう。yabtāru「試す」は、「頼りない梯子を用心して登る」の意か。

3) 酒はアラビア半島の外から持ち込まれるので、通訳を介して入手する必要があった。

4) 冒頭部の省略を推定し、訳した。

—— (126) アブー・ズアイブ・アルフザリー ——

أَبُو ذُوَيْبِ الْهَذَلِيِّ

まえがき

本名フワイリド・ブヌ・ハーリド・ブヌ・ムハッリス Khuwaylid b. Khālid b. Muḥarrith。詩人は、本名よりも親子関係を表すアブー・ズアイブという名でよく知られている。

彼はフザイル Hudhayl 族の中で最も有名な詩人で、この詩は彼の作品のなかで特に傑作とされるものである。

彼の部族はアルヒジャーズを拠点とし、No. 1 のタアッバタ・シャッランが属したファム族の北側を領域にしていた、北アラブの一族であった。フザイルは預言者と対立したメッカ側の味方をしていたが、630 年代にイスラームに改宗した。この部族の5代にわたる詩集は、アッスッカリー (al-Sukkarī, 827-888 または 903) により編纂されたものが伝えられている。これは唯一現存する部族単位の詩集とされている (Sharḥ ʿAshʿār al-Hudhaliyyīn. Ed. by A. Farrāj, 3 vols. Cairo, 1965)。フザイル族の大部分の詩人は、ジャーヒリーヤ時代からイスラーム初期にかけて活躍したいわゆるムハドリムであり、その部族詩集は、ムハンマドから正統カリフ時代の状況を探る資料として貴重なものである。

アブー・ズアイブは預言者の時代からウスマーンの時代まで生き、晩年にはイスラーム教徒になった。彼は預言者と会うため 632 年 6 月にメディナへ部族代表団に参加していたが、預言者が没したためその葬儀に加わったと言われている。

彼は信心深いイスラーム教徒となり、エジプト征服軍に参加し、さらに、チュニス攻略戦にも加わった。この戦いの戦勝報告の使者としてアブド・アッラー・ブヌ・アズバイルがメディナのウスマーンの元へ派遣されたとき詩人も同行したが、途中で死亡し、アブド・アッラーによって埋葬された (H28 年)。彼には 5 人の息子がいてすべてエジプト遠征に参加したが、H 18 年 (638-9) のペスト大流行の年に全員死亡した。この詩は彼らの死が主題をなし、欠落部分が無い優れた詩として古来高く評価されてきた。

この詩の 1-15 行までは失った五人の息子らへの哀悼に当てられている。一般的にフザイル族の詩人は、他の部族の詩人のように序詞の部分でかつての恋人が住んでいた廃墟に立ち泣くという常套的な手法を取らないと言われているが、この詩はその典型をなしている。また、それに次ぐラクダや馬での旅、ラクダや馬の描写や自慢の部分もなく、16-36 行で野生のロバの死、37-50 行で野生の雄牛の死、51-65 行で完全武装の勇士が対決、この三段階で死の不可避性を詠んでいる。カーミル調、65 行。

(126) テキスト

وَقَالَ أَبُو ذُوَيْبٍ

- ١- أَمِنَ الْمُنُونِ وَرَيْبَهَا تَتَوَجَّعُ
 - ٢- قَالَتْ أُمَيْمَةُ مَا لِحِسْمِكَ شَاحِبًا
 - ٣- أَمْ مَا لِحَنْبِكَ لَا يُلَايِمُ مَضْجَعًا
 - ٤- فَأَجَبْتُهَا أَمَّا لِحِسْمِي أَنَّهُ
 - ٥- أَوْدَى بَنِيَّ وَأَعْقَبُونِي غَصَّةً
 - ٦- سَبَقُوا هَوًى وَأَعْنَقُوا لِهَوَاهُمْ
 - ٧- فَعَبَرْتُ بَعْدَهُمْ بَعِيشٍ نَاصِبٍ
 - ٨- وَلَقَدْ حَرَصْتُ بِأَنْ أَدَافِعُ عَنْهُمْ
 - ٩- وَإِذَا الْمَنِيَّةُ أَنْشَبَتْ أَظْفَارَهَا
 - ١٠- فَالْعَيْنُ بَعْدَهُمْ كَأَنَّ حِدَافَهَا
 - ١١- حَتَّى كَأَنِّي لِلْحَوَادِثِ مَرْوَةٌ
 - ١٢- وَتَجَلَدِي لِلشَّامِتِينَ أُرِيهِمْ
 - ١٣- وَالنَّفْسُ رَاغِبَةٌ إِذَا رَغَبَتْهَا
 - ١٤- وَلَئِنْ بِهِمْ فَجَعَ الزَّمَانُ وَرَيْبُهُ
 - ١٥- كَمْ مِنْ جَمِيعِ الشَّمْلِ مُلْتَمِعِ الْقَوَى
 - ١٦- وَالذَّهْرُ لَا يَبْقَى عَلَى حَدَثَانِهِ
 - ١٧- صَحْبُ الشَّوَارِبِ لَا يَزَالُ كَأَنَّهُ
 - ١٨- أَكَلَ الْجَمِيمَ وَطَاوَعْتُهُ سَمَحَجٌ
 - ١٩- بِقَرَارِ قِيَعَانٍ سَقَاهَا وَابِلٌ
 - ٢٠- فَلَبِثَ حِينًا يَغْتَلِجُنَ بِرَوْضِهِ
 - ٢١- حَتَّى إِذَا جَزَرَتْ مِيَاهُ رُزُونِهِ
 - ٢٢- ذَكَرَ الْوُرُودَ بِهَا وَشَاقَى أَمْرَهُ
 - ٢٣- فَافْتَنَّهُنَّ مِنَ السَّوَاءِ وَمَاؤُهُ
 - ٢٤- فَكَأَنَّهَا بِالْجَزَعِ بَيْنَ نُبَايِعَ
 - ٢٥- وَكَأَنَّهُنَّ رِبَايَةَ وَكَأَنَّهُ
 - ٢٦- وَكَأَنَّهَا هُوَ مَدُوسٌ مُتَقَلِّبٌ
 - ٢٧- فَوَرَدَنَ وَالْعَيُوقُ مَقْعَدُ رَابِعٍ الـ
 - ٢٨- فَشَرَعْنَ فِي حَجَرَاتٍ عَذَبٍ بَارِدٍ
- وَالذَّهْرُ لَيْسَ بِمُعْتَبٍ مَنْ يَجَزَعُ
مُنْذُ ابْتِذَلَتْ وَمِثْلُ مَالِكَ يَنْفَعُ
إِلَّا أَقْضَى عَلَيْكَ ذَاكَ الْمَضْجَعُ
أَوْدَى بَنِيَّ مِنَ الْبِلَادِ فَوَدَّعُوا
بَعْدَ الرُّقَادِ وَعَبْرَةً لَا تُقْلِعُ
فَتُخَرِّمُوا وَلِكُلِّ جَنْبٍ مَصْرَعُ
وَأَحَالُ أَنِّي لَا حِقُّ مُسْتَتَبِعُ
فَإِذَا الْمَنِيَّةُ أَقْبَلَتْ لَا تُدْفَعُ
أَلْفَيْتُ كُلَّ تَمِيمَةٍ لَا تَنْفَعُ
سُمِلْتُ بِشَوْكِ فَهِيَ عَوْرٌ تَدْمَعُ
بَصَفَا الْمَشْرِقِ كُلِّ يَوْمٍ تُفْرَعُ
أَنِّي لِرَيْبِ الذَّهْرِ لَا أَتَضَعُضَعُ
وَإِذَا تُنْزَرْدُ إِلَى قَلِيلٍ تَفْنَعُ
إِنِّي بِأَهْلِ مَوَدَّتِي لَمْفَجَعُ
كَأَنُوا بِعِيشٍ قَبْلَنَا فَتَصَدَّعُوا
جَوْنُ السَّرَاةِ لَهُ جَدَائِدُ أَرْعَعُ
عَبْدٌ لِأَلِ أَبِي رَبِيعَةٍ مُسْبَعُ
مِثْلُ الْقَنَاقَةِ وَأَزْعَلْتُهُ الْأَمْرَعُ
وَإِهْ فَأَتَجَمَّ بُرْهَةً لَا يُقْلِعُ
فَيُجِدُّ حِينًا فِي الْعِلَاجِ وَيَشْمَعُ
وَبِأَيِّ حِينٍ مَلَاوَةٍ تَتَقَطَّعُ
شَوْمٌ وَأَقْبَلَ حِينُهُ يَتَتَبَّعُ
بَشَرٌ وَعَانَدُهُ طَرِيقُ مَهْيَعُ
وَأُولَاتِ ذِي الْعَرْجَاءِ نَهَبٌ مُجَمَّعُ
يَسْرُ يُفْيِضُ عَلَى الْقِدَاحِ وَيَصْدَعُ
فِي الْكَفِّ إِلَّا أَنَّهُ هُوَ أَضْلَعُ
ضَرْبَاءِ فَوْقَ النَّظْمِ لَا يَتَتَلَّعُ
حَصْبِ الْبَطَاحِ تَغِيبُ فِيهِ الْأَكْرَعُ

شَرَفُ الْحِجَابِ وَرَيْبَ قَرْعٍ يُقْرِعُ
فِي كَفِّهِ جَشْءٌ أَجَشُّ وَأَقْطَعُ
سَطْعَاءُ هَادِيَةٍ وَهَادٍ جُرْشُعُ
سَهْمًا فَخَرَّ وَرَيْشُهُ مُتَصَمِّعُ
عَجَلًا فَعَيْثَ فِي الْكِنَانَةِ يُرْجَعُ
بِالْكَشْحِ فَاشْتَمَلَتْ عَلَيْهِ الْأَضْلَعُ
بِذَمَائِهِ أَوْ بَارِكُ مُتَجَعِّعُ
كُسَيْتُ بُرُودِ بَنِي تَزِيدِ الْأَذْرُعُ
شَبَبُ أَفْرَزَتِهِ الْكِلَابُ مُرَوِّعُ
فَلِذَا رَأَى الصُّبْحَ الْمُصَدَّقُ يَفْرَعُ
قَطْرُ وَرَاحَتِهِ بَلِيلُ رَعْرَعُ
مُغْضٍ يُصَدِّقُ طَرْفُهُ مَا يَسْمَعُ
أُولَى سَوَابِقِهَا قَرِيبًا تُوزَعُ
غُبْرُ ضَوَارٍ وَافِيَانٍ وَأَجْدَعُ
عَبْلُ الشَّوَى بِالطَّرَّتَيْنِ مُوَلَّعُ
بِهِمَا مِنَ التَّضْحِ الْمَجْدَحِ أَيْدَعُ
عَجَلًا لَهُ بِشَوَاءٍ شَرِبَ يُنْزَعُ
مُتَتَرَّبٌ وَلِكُلِّ جَنْبٍ مَصْرَعُ
مِنْهَا وَقَامَ شَرِيدُهَا يَتَضَوِّعُ
بَيْضُ رَهَابٍ رَيْشُهُنَّ مُقْرَعُ
سَهْمٌ فَأَنْفَذَ طَرَّتِيهِ الْمِنْزَعُ
بِالْحَبْتِ إِلَّا أَنَّهُ هُوَ أَبْرَعُ
مُسْتَشْعِرُ حَلَقِ الْحَدِيدِ مُقْنَعُ
مِنْ حَرِّهَا يَوْمَ الْكَرْبَةِ أَسْفَعُ
حَلَقَ الرِّحَالَةِ فَهِيَ رِخْوُ تَمْرَعُ
بِالنَّيِّ فَهِيَ تَشْوُخُ فِيهَا الْإِصْبَعُ
كَالْفَرْطِ صَاوٍ غُبْرُهُ لَا بُرْضَعُ
إِلَّا الْحَمِيمُ فَإِنَّهُ يَتَبَضَّعُ
يَوْمًا أُتِيحَ لَهُ جَرِيٌّ سَلْفَعُ
صَدَعُ سَلِيمٍ رَجْعُهُ لَا يَظْلَعُ
وَكِلَاهُمَا بَطْلُ اللَّقَاءِ مُخَدَّعُ

۲۹- فَشَرِبْنَ ثُمَّ سَمِعْنَ حِسًّا دُونَهُ
۳۰- وَنَمِيمَةً مِنْ قَانِصٍ مُتَلَبِّبٍ
۳۱- فَنَكِرَتْهُ وَنَقَرْنَ وَامْتَرَسَتْ بِهِ
۳۲- فَرَمَى فَأَنْفَذَ مِنْ نَجُودٍ عَائِطٍ
۳۳- فَبَدَا لَهُ أَقْرَابُ هَذَا رَائِعًا
۳۴- فَرَمَى فَأَلْحَقَ صَاعِدِيًّا مِطْحَرًا
۳۵- فَأَبَدَهُنَّ حُثُوفَهُنَّ فَهَارِبٌ
۳۶- يَغْتَرْنَ فِي حَدِّ الطُّبَاتِ كَأَنَّمَا
۳۷- وَالْدَّهْرُ لَا يَبْقَى عَلَى حَدَثَانِهِ
۳۸- شَعَفَ الْكِلَابُ الضَّارِيَاتُ فُؤَادَهُ
۳۹- وَيُعَوِّذُ بِالْأَرْضَى إِذَا مَا شَقَّه
۴۰- يَرْمِي بَعَيْنِيهِ الْعُيُوبَ وَطَرْفُهُ
۴۱- فَعَدَا يُشْرِقُ مَتْنَهُ فَبَدَا لَهُ
۴۲- فَاهْتَجَّ مِنْ قَرْعٍ وَسَدَّ فُرُوجَهُ
۴۳- يَنْهَشُنَّهُ وَيَذُبُّهُنَّ وَيَحْتَمِي
۴۴- فَحَا لَهَا بِمُذَلِّقِينَ كَأَنَّمَا
۴۵- فَكَأَنَّ سَفُودَيْنِ لَمَّا يُقْتَرَا
۴۶- فَصَرَعْنَهُ تَحْتَ الْعُبَارِ وَجَنَّبَهُ
۴۷- حَتَّى إِذَا ارْتَدَّتْ وَأَقْصَدَ عُصْبَةً
۴۸- فَبَدَا لَهُ رَبُّ الْكِلَابِ بِكَفِّهِ
۴۹- فَرَمَى لِيُنْقِذَ فَرَّهَا فَهَوَى لَهُ
۵۰- فَكَبَا كَمَا يَكْبُو فَنِيْقُ تَارِزُ
۵۱- وَالْدَّهْرُ لَا يَبْقَى عَلَى حَدَثَانِهِ
۵۲- حَمِيَتْ عَلَيْهِ الدَّرْعُ حَتَّى وَجْهَهُ
۵۳- تَعْدُو بِهِ حَوْصَاءُ يَفْصِمُ جَرِيَّهَا
۵۴- قَصَرَ الصَّبُوحُ لَهَا فَشَرَّجَ لَحْمُهَا
۵۵- مُتَفَلِّقٌ أَنْسَاؤُهَا عَنْ قَانِي
۵۶- تَأْبَى بِدِرَّتِيهَا إِذَا مَا اسْتَعْصَبَتْ
۵۷- بَيْنَا تَعْنُقُهُ الْكُمَاةُ وَرُوزِغِهِ
۵۸- يَعْدُو بِهِ نَهْشُ الْمُشَاشِ كَأَنَّهُ
۵۹- فَتَنَادِيَا وَتَوَاقَفَتْ خَيْلَاهُمَا

- ٦٠- مُتَحَامِيَيْنِ الْمَجْدَ كُلِّ وَائِقٍ
 ٦١- وَعَلَيْهِمَا مَسْرُودَتَانِ قَضَاهُمَا
 ٦٢- وَكِلَاهُمَا فِي كَفِّهِ يَزْنِيَّةٌ
 ٦٣- وَكِلَاهُمَا مُتَوَشِّحٌ ذَا رُوْنِقٍ
 ٦٤- فَتَحَالَسَا نَفْسَيْهِمَا بِنَوَافِذٍ
 ٦٥- وَكِلَاهُمَا قَدْ عَاشَ عَيْشَةً مَاجِدٍ
- بِبَلَائِهِ وَالْيَوْمُ يَوْمٌ أَشْنَعُ
 دَاوُودُ أَوْ صَنَعَ السَّوَابِغُ تُبَّعُ
 فِيهَا سِنَانٌ كَالْمَنَارَةِ أَصْلَعُ
 عَضْبًا إِذَا مَسَّ الصَّرِيْبَةَ يَقْطَعُ
 كَنَوَافِذِ الْعُبُطِ الَّتِي لَا تُرْفَعُ
 وَجَنَى الْعَلَاءِ لَوْ أَنَّ شَيْئًا يَنْفَعُ

(126) 訳

- 1- 君は、時世とその移ろいやすさを悲しむのか。否、運命は不運を嘆く者をかえりみたりはしない。
- 2- ウマイヤは言った。“変わり果てたご様子。お体の具合が悪いのですか。不幸な目に会われましたが、でも、あなたには十分財産がありますわ。
- 3- それとも、寝台に眠りを妨げるものがあるのですか。そこに小石のようなものがあるって、安眠を邪魔立っているのではありませんか。”
- 4- そこで私は答えた。“わが身に起こったことといえば、息子らが異国で死んでしまい、永遠の別れを告げたことだ。”
- 5- 息子らは死に、その結果、人々が眠りについたあと、私の喉は嗚咽でふさがれ、とめどなく涙が流れるようになった。
- 6- 彼らは私より先だって、急ぎ旅立ち、あの世に取られてしまった。あらゆるものは死をまぬがれないのであるが。
- 7- 彼らの亡き後、私は苦痛のなかで生き残った。だが、私もまもなく彼らに追いつき、人々に追われる身となるだろう。
- 8- 私は息子達を守ってきたが、死の運命が訪れると、これを押し返すすべは無い。
- 9- 運命が獲物に蹄をかける時には、あなたは、いかなる護符も無力だということを知るだろう。
- 10- 息子達を失ったあとの私の目は、あたかも、瞳孔に刺さった棘が取り出され、失明したまま涙を流しているかのようだ。
- 11- 私は、まるで、時世の転変に対して、礼拝所の敷石にまぎれる火打石のようなもので、毎日大勢の人々に踏みつけられているようだ¹⁾。
- 12- わたしの不幸を喜ぶ者に対しては耐え忍び、彼らに私が運命の移ろいに卑屈にされないところを示してやる。
- 13- 人は浴心を搔きたてられると、より多く得よう望み、欲心を抑えられると、わずかなものに満足するものだ。
- 14- 時世とその有為転変が人々を苦しめるものとすれば、まさに私は愛する家族を失ってひしがれている²⁾。

1) アルムシャッラク al-musharraḥq については二説ある。メッカ近くのミナーのアルイーダイン・モスク (Masjid al-ʿIdayn) とし、ここでは断食月明けのシャウワール月 1 日と、ズー・アルヒッジャ月 10 日の犠牲祭に大勢が集まって礼拝が行われる。そこで、この語は礼拝所と解された。今ひとつは、アルムシャッカル al-mushaqqar と読み、アッターイフの市場とする説。

2) カイロ版による追加。

- 15- 息子らが生きていた頃には、私達は幾度も共に力を合わせて事に当たったが、今や、彼らはあの世に分かれて行ってしまった³⁾。
- 16- 運命は移ろいやすく、乳房がしぼんだ雌ロバが付き添っていた野生の雄ロバとて、生き残れない。
- 17- ロバは、喉で絶えず泣き続けていた。まるで、野獣を追っ払おうとして叫び続けている、アブー・ラビーア家の奴隷のようであった。
- 18- 雄ロバは密生して伸びた草を食べ、槍のような細身の雌ロバがこれに寄り添っていた。豊かな草は雄ロバに活力を与えた。
- 19- 平地の窪みに叩きつけるような大雨が、降り注いで池となり、溢れるばかりの水は、雨が次々に降るので、減ることはなかった。
- 20- 野生のロバはその草原で、しばらくは、互いにかみ合ったりして留まっていた。すなわち、時には本気で噛み付き、時には、ふざけて噛み付いたりしていた。
- 21- だが、ついに、その水溜りは干上がってしまった。なんとという短い時間に水が断ち切られたことだろう⁴⁾。
- 22- 雄ロバは、件の水溜りに降りて行こうと思った。しかし、凶運がロバに襲い掛かろうとしており、破滅が跡を追っていた。
- 23- そこで、雄ロバは雌ロバたちを、黒い火山岩地からあの手この手で追い立てた⁵⁾。
(目ざす) 水場には水が豊富にあった。だが、はっきりとした道筋は通らなかった。
- 24- ヌバーイウとズー・アルアルジャーウ⁶⁾の間の屈曲部に集まった野生のロバたちは、まるで、略奪されて、追い詰められたラクダの群れのようにであった。
- 25- 雌ロバは、マイシルゲームの賭け矢のようなものであり、雄ロバは賭け矢を引かせ、結果を発表する仕切り役のような者である⁷⁾。
- 26- 雄ロバは、磨ぎ師が手の平で操る砥石のように、動き回るが、体つきは強大である。
- 27- かくして、ロバたちは水場にやってきた。ちょうどカペラ座の星が、双子座が昇る前に天空に輝き、(マイシルゲームの) 見張り役が椅子に座る頃であった⁸⁾。
- 28- ロバたちは、川底一面に砂利が広がっているところで冷たくて甘い水の中に足が隠れるまで入り、水面に首を伸ばした⁹⁾。
- 29- こうして、ロバたちは水を飲んだのだが、背後の火山岩の高台の方から物音を聞いた。それは、弓で何かを射る音かと疑わせる音であった。
- 30- すなわち、帯を締めた獵師の身動きする音を聞いたのである。彼の手には耳障りな

3) 同じくカイロ版による追加。

4) 野生のロバを取り巻く自然条件の激変を、運命の有為転変にかけている。

5) アッサワーウ (al-sawāʾ) は火山岩地のアルハッラのこと。メッカからマディーナの北方に広がっている。「多い」の意との説もあるほか、ナジュドとティハーマの中間にあったザート・イルク *Dhāt ʿIrq* の水場とも言われている。

6) ズー・アルアルジャーウ *Dhū al-ʿArjāʾ* は地名と思われるが、「小山、丘など」の意味もある。

7) 雄ロバは集めた雌ロバを完全に掌握し、思いのまま動かす。これをマイシルゲームの、仕切り役と賭け矢にたとえている。*yaṣḍaʿu* は「ゲームに参加した者に、賭けに基づいてラクダの肉を切り分配し、結果を明示する」の意。

8) *maqʿada rābiʿi al-ḍurabāʿi* 「(マイシルゲームで古い矢を) 射る者たちを見張る者が椅子に座る頃」。カペラ座は双子座より先に昇る。前者が夜の終わりごろ輝く季節は非常に暑く、ロバがこの季節に水場にやってきたことを示している。

9) *ḥaṣīb al-biṭāh* 「川底一面の砂利が広がっている」とは、水が澄み切っていて飲むのに適していることを表している。

- 音を出すナブウの棒と、短くて幅広の槍の穂先が握られていた。
- 31- ロバたちは、その音に不安を感じて逃げた。首の長い先頭の雌ロバは、腹が張った雄ロバに寄り添い、雄ロバもこれに寄り添って逃げた。
- 32- これに向かって獵師が矢を放つと矢は、子をはらんでいない、背の高い雌ロバを貫通して血に染まった。
- 33- (これを見て) 急いで脇にそれて逃げようとする雄ロバが獵師の目に映ると、彼は矢を取ろうとして矢筒に手を伸ばした。
- 34- 獵師が矢を放つと、サアダ産の遠矢は雄ロバの横腹に突き刺さり¹⁰⁾、肋骨の中に埋もれて見えなくなった。
- 35- かくして、獵師はロバたちに死を配分した。すなわち、余命を保って逃げたロバもいれば、地面に身を投げ出したロバもいた。
- 36- ロバたちは矢の穂先でよろめき、その前脚は、バヌー・タジードの(赤い縞模様の)外衣を着せられたように¹¹⁾、血筋で染まっていた。
- 37- 運命は移ろいやすく、若くて精気あふれる雄牛とて、生き残れない。すなわち、犬どもが雄牛をおびえさせ、追い立てた。
- 38- 良く鍛えた獵犬は、雄牛の心を悩ませた。雄牛は、朝の光が射し始める頃になると、(獵師が犬をけしかけるので) 恐怖を感じる。
- 39- 雄牛は(夜) 雨に降られたり、寒くて強い北風に苦しめられるときには、アルアルター樹の根元に避難する¹²⁾。
- 40- 雄牛は両目で瞬きながら、窪みを見渡した。その目は、耳で聞いたことを確かめるのである¹³⁾。
- 41- 雄牛が朝、体を日に当てて乾かそうとしたとき、一番手の獵犬が、後から来る獵犬を待つために、直ぐ近くに控えているのが見えた。
- 42- 雄牛は恐怖にかられて逃げようとしたが、茂みの出口を、良く鍛えられた三匹の獵犬が塞いでいた。二匹の耳は正常で、一匹のそれは切られていた。
- 43- 獵犬が野牛に噛み付くと¹⁴⁾、野牛は犬を追っ払い、四肢で身を守る。野牛の両横腹には二筋の縞目が付いていた。
- 44- 雄牛は顔をそむけて、犬に鋭い二本の角で突きにかかったが、まるで、犬の内臓のなかで角をかき混ぜ、アイダウ(赤い染料)のように¹⁵⁾、赤い血で染めるかのようであった。
- 45- (血を滴らせた雄牛の角は) まるで、酒宴での生焼きの肉の二本の焼き串のようであった¹⁶⁾。すなわち、角で犬を急ぎ突き、突かれた犬から引き抜かれたのである。

10) *ṣā'idīy-an* は訳のようにアルヤマンのサアダ (*Ṣa'da*) 村産の矢と説明されているが、Lane の辞書では「野生のロバは *banātu ṣa'da* と呼ばれていた」とある。おそらく高原に野生していたロバであろうが、これを取ると、訳は「高原に住む野生のロバの横腹に遠矢が貫通した」となる。

11) バヌー・タジードは No. 120, 4 行(脚注 3)を参照。

12) アルアルターは No. 34, 15 行(脚注 7), No. 119, 18 行(脚注 7)に既出。

13) *yūṣaddīqu* の主語は *mā yasma'u* との説もある。野獣の感覚は鼻が一番鋭く、次が耳で、目はこれらより劣るとされているため。

14) ここで野牛とされているのは、オリックスのことであろう。これはカモシカ的一种で、両横腹に二筋の暗褐色の縞目 *turra* がついており、背中が白い。

15) *ʿayda'u* 「赤く染める染料」。

16) 野牛が獵犬を突いた角を抜くと血塗られているのを、宴会で生焼き肉を食べるのに喩えた。

- 46- 猟犬は雄牛を土ぼこりの下に倒し、その脇腹は汚れていた。あらゆるものは死をまぬがれない¹⁷⁾。
- 47- やがて猟犬は引き下がり、雄牛はその数匹を殺し、残った犬は雄牛を恐れて吠えた。
- 48- そこで、犬の飼い主である猟師が、毛が千切れている白く輝く細い穂先の矢を持って、雄牛の前に現れた。
- 49- 猟師は後退した猟犬を救うために、矢を射た。矢は雄牛に突き刺さり、脇腹の筋模様様の箇所を貫通した。
- 50- すると、雄牛はうつ伏せに倒れたが、まるで、種ラクダが（メスをめぐつての争いに敗れ）息絶え絶えにうつ伏せになったようであった。否、雄牛のほうが見事な倒れ方であった。
- 51- 運命は移ろいやすく、鎖帷子を下に着込み、鉄の兜をかぶる者として生き残れない。
- 52- 彼が着ている鎖帷子は熱くなり、戦火の日、暑さのため彼の顔は黒くなった。
- 53- 彼を乗せて目の窪んだ雌馬が駆けるが、楽々と疾駆するにつれ、鞍帯の輪が裂けてしまう。
- 54- 彼は雌馬のために、朝飲むミルクを残しておくが、そのために、馬の肉には脂肪がまざって肥満し、指で押すと肉の中に指が隠れてしまう¹⁸⁾。
- 55- 馬の大腿の間には隙間があり、耳飾りのような深紅の干乾びた乳房が見えており、そこに残っているミルクは飲まれたことがない。
- 56- 馬は鞭でけしかけられると、ミルクを出すのではなく汗を出す、体が熱くなっても、皮膚が湿る程度にしか汗を流さない¹⁹⁾。
- 57- 武具で身を固めた敵と、掴み合ったり身をかわしたりしているうちに、いつの日か勇敢で強力な騎士と対決する運命が待っている²⁰⁾。
- 58- 四肢が軽快な雄馬が、彼を乗せて走る（こともある）。それは若いカモシカのように、足を引くときにびっこを引いたりはしない。
- 59- 互いに戦いの声を上げ、双方の軍馬が対峙した。二人ともに歴戦の勇士である。
- 60- 双方とも栄光を守りたく、それぞれが自分こそ相手を倒すと信じている。それはまことに悲惨な日である。
- 61- 両者は共に鎧で身を固めているが、いずれも、ダビデかトッバウの鎧の匠が見事に仕上げたものである²¹⁾。
- 62- 両者は共にズー・ヤザンの槍を携えているが²²⁾、その槍の穂先はランプの光のように輝いている。
- 63- 両者は共に鋭い剣を帯びているが、その刃に触れた者は一撃の下に切断されてしま

17) この1行は前後の関係からこの箇所では不適切。前の行では雄牛が犬を突き刺している。

18) アルアスマイーは「下の句は、詩人は馬主ではなく、馬のことが良く分かっていない。このように肥満した馬は少し走っただけで使い物にならなくなる」と批判している。

19) アルアスマイーは 54 行と同じ理由で「詩人は誤ったことを言っている」とし、「馬は走ると汗だけを流す」と述べている。アブー・ウバイダは「この馬にはミルクもなにもなく、流すのは汗だけだ」と解釈している。

20) 古代アラブの戦闘順序は、最初は槍による突き合い、次は刀による切り合い、最後は掴み合いであった。

21) No. 10, 35 行と脚注27を参照。

22) ズー・ヤザン Dhū Yazan は、ヒムヤル王家の王または王子の名で、ヤザンは彼の宮殿の名。優れた槍は彼にちなんで呼ばれた。

う。

- 64- 両者は共に相手の命を一突きで奪おうと競った。その突きは、継ぎ当てができないように、布を引き裂くようなものである²³⁾。
- 65- 両者は共に、輝かしい人生を送った。万一²⁴⁾、(死を)避けることができたなら、最高の地位を得るであろうに。

23) ʿubut (ʿabīṭ「屠殺されたラクダ」の複数)。ここでは、一突きで相手が生命を失うことを、「継ぎを当てても元に戻せないように布を裂くこと」になぞらえている。なお、アルアンバーリーにはないが、Lyll は他の詩集から、この詩の最後の行にふさわしいと、次の1行を引用。
fa-ʿafat dhuyūlu al-rīḥi baʿdu ʿalay-himā wa-al-dahru yaḥṣudu raybu-hu mā yazraʿu (だが、風が裾を払って両者の墓を消し去った。運命の移ろいは、植えたものを刈り取るものだ。)

24) [校正者注：lawā (ʿ)nnā = law ʿanna. Lyll 版テキスト 884 頁注釈参照。]

— 補遺 —

イブン・アンナディーム（10 世紀、バグダードの書肆）著『書誌目録』al-Fihrist によると、詩集アルムファッダリーヤートには 128 篇の詩があるとされているが、アルアンバーリーの注釈書には 126 篇しかない。本詩集のウィーン写本は本詩集 No. 3 を欠くが、補遺として以下に訳す 3 篇を含み、合わせると全体で 128 篇となる。

なお、No. 130（補遺 4）のアルムマッザクの詩は No. 81 と事実上同じで、一部の増減と行の順序の入れ替えあるのみである。このため、既に No. 81 に組み入れて訳したので、この補遺には含まない。

— (127) 補遺 1 アルハーリス・ブヌ・ヒッリザ —

الحَارِثُ بْنُ حِلْزَةَ

この詩人については No. 25 「まえがき」を参照。サリーウ調、8 行。

(127) テキスト

وَقَالَ الْحَارِثُ بْنُ حِلْزَةَ

- | | |
|--------------------------------------|--|
| وَقَدْ حَبَا مِنْ دُونِهَا عَالِجٌ | ١- قُلْتُ لِعَمْرٍو حِينَ أَبْصَرْتُهُ |
| إِنَّكَ لَا تَذَرِي مِنَ النَّاتِجِ | ٢- لَا تَكْشَعُ الشُّوْلَ بِأَغْبَارِهَا |
| فَإِنَّ شَرَّ اللَّبَنِ الْوَالِجِ | ٣- وَاحْلُبْ لِأَضْيَافِكَ أَلْبَانَهَا |
| لَا مُبْطِئُ الشَّدِّ وَلَا عَائِجِ | ٤- رَبِّ عِشَارٍ سَوْفَ يَغْتَالُهَا |
| كَمَا يَسُوقُ الْبَكْرَةَ الْفَالِجِ | ٥- يَسُوقُهَا شَلًّا إِلَى أَهْلِهِ |
| فَأُطْرِدَ الْحَائِلُ وَالِدَالِجِ | ٦- قَدْ كُنْتَ يَوْمًا تَرْتَجِي رِسْلَهَا |
| تَاحَ لَهُ مِنْ أَمْرِهِ خَالِجِ | ٧- بَيْنَا الْفَتَى يَسْعَى وَيُسْعَى لَهُ |
| يَعِثُ فِيهِ هَمَجٌ هَامِجِ | ٨- يَتْرُكُ مَا رَفَحَ مِنْ عَيْشِهِ |

(127) 訳

- 1- 私はアムルを見たときに言ったが、雌ラクダの背後にはアーリジュ砂漠が近づいていた¹⁾。
- 2- “乳が乏しくなったラクダの乳を（客のために）搾り出すのを惜しむな。というの

1) アーリジュ °Ālij は、シリアとクーフアの間に広がる砂漠。アムルは詩人の息子が牧童。

- は、お前には、このラクダが子を生むのを誰が世話をするか分からないからだ²⁾。
- 3- 客達にはラクダの乳を搾って与えよ。まことに最悪の乳は、ラクダに吸収されて（これを太らす、乳房に）残った乳である。
 - 4- なんと多くの10ヵ月の妊娠ラクダが、奪われたことだろう。略奪者は歩みを緩めず、手加減もしない。
 - 5- 略奪者はラクダを一族のもとに追い立てるが、まるで、二こぶの大型雄ラクダが幼い雌ラクダを追い立てているようである³⁾。
 - 6- お前にラクダの乳を望む日があったとしても、不妊ラクダも、重たげに歩む妊娠ラクダも略奪され、追い立てられることもあろう。
 - 7- 人は精を出し、他人も彼のために尽くしてくれても。やがて、死は彼を捕らえ、連れ去るものだ。
 - 8- 彼は営々と貯えた財産を残すが、ブヨのように弱くて飢えた相続人が、これを台無しにしてしまう。”

2) 直訳すると「乳房に冷たい水をかけて、わずかに残っている乳をラクダに吸収させ太らせるな。お前は死ぬか、ラクダが奪われるか明日のことは分からないので、今あるものを惜しまず費やして客をもてなせ、人間には明日の運命は分からない。」がこの行の大意。

3) falij は「バクトリア種とアラブ種が混血した二こぶの大型ラクダ」。

—— (128) 補遺 2 アルムラッキシュ・アルアクバル ——

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

この詩人は No. 45-54 に既出で、No. 45「まえがき」参照。バシート調、4 行。

(128) テキスト

وَقَالَ الْمُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

١- يَا ذَاتَ أَجْوَارِنَا قُومِي فَحَيِّينَا وَإِنْ سَقَيْتِ كِرَامَ النَّاسِ فَاسْقِينَا
٢- وَإِنْ دَعَوْتَ إِلَى جُلَى وَمَكْرَمَةٍ يَوْمًا سَرَاةَ خِيَارِ النَّاسِ فَادْعِينَا
٣- شُعْتُ مَقَادِمُنَا نُهْبَى مَرَاجِلُنَا نَأْسُو بِأَمْوَالِنَا آثَارَ أَيْدِينَا
٤- الْمُطْعَمُونَ إِذَا هَبَتْ شَامِيَةٌ وَخَيْرُ نَادٍ رَأَهُ النَّاسُ نَادِينَا

(128) 訳

- 1- 我が隣人の娘よ、さあ、立って、我らに挨拶をしてくれ。そなたが貴人らに酒を注ぐのであれば、我らにこそ注いでくれ。
- 2- もし、そなたが何時の日か、重大な問題や高貴な行いにつき、選り抜きの貴人らに呼びかけるなら、我らに呼びかけよ。
- 3- 我らの前髪は乱れており¹⁾、我らの大鍋は（客のための）戦利品である。我らは、自らの財産で手傷を治す。
- 4- 我らは冷たい北風が吹くとき、（飢えた者たちに）食を与える。人々が最善の集いと認めているのは、我らの集いである。

1) 「前髪が乱れている」とは、ヘルメットを常時着用し戦闘に関わっていること。また、下の句は、血債を豊かな財産（ラクダなど）で支払い、人命を失わない部族の強さと富を誇ったもの。

— (129) 補遺 3 アルムラッキシュ・アルアクバル —

المُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

この詩人は補遺 2 と同じで、No. 45-54 に既出。この詩では、詩人のいここにあたるアスマーウへの恋を詠んでいる。彼女は、彼女の父の計らいでムラード Murād 族の男と結婚した。詩人と彼女の部族カイス・ブヌ・サアラバの本拠は、アルヤマーマの山地であった。従って、本詩 3 行目に「彼女が以前シリアに住んでいた」とあるのは理解しがたい。ハフィーフ調、8 行。

(129) テキスト

وَقَالَ الْمُرْقَشُ أَيْضًا

- | | |
|--|---|
| وَانْظُرِي أَنْ تُزَوِّدِي مِنْكَ زَادًا | ١- قُلْ لِأَسْمَاءَ أَنْجِزِي الْمِيعَادَا |
| أَوْ بِلَادٍ أُحْيَيْتِ تِلْكَ الْبِلَادَا | ٢- أَيْنَمَا كُنْتَ أَوْ حَلَلْتَ بِأَرْضِ |
| م وَجَاوَزْتَ حِمِيْرًا وَمُرَادَا | ٣- إِنْ تَكُونِي تَرَكْتَ رَبْعَكَ بِالشَّامِ |
| فَاسْأَلِي الصَّادِرِينَ وَالْوَرَادَا | ٤- فَارْتَجِي أَنْ أَكُونَ مِنْكَ قَرِيْبَا |
| نَ يَقُوْدُونَ مُقَرَّبَاتٍ حِيَادَا | ٥- وَإِذَا مَا رَأَيْتِ رَكْبًا مُخْبِيْ |
| سِ يُزْجُونَ أَيْنُقَا أَفْرَادَا | ٦- فَهُمْ صُحْبَتِي عَلَى أَرْحْلِ الْمِيْدِ |
| بِمُحِبٍّ قَدْ مَاتَ أَوْ قِيلَ كَادَا | ٧- وَإِذَا مَا سَمِعْتَ مِنْ نَحْوِ أَرْضِ |
| ذَاكَ وَابْكِي لِمُصْفَدٍ أَنْ يُفَادَى | ٨- فَأَعْلَمِي غَيْرَ عِلْمِ شَكٍّ بِأَنْبِي |

(129) 訳

- 1- アスマーウに伝えてくれ。“私との約束を果たしてくれ。そなたの楽しい語らいで(私の旅を) 勇気づけて欲しい¹⁾。
- 2- そなたはどこに住もうと、開けた土地であろうと荒地であろうと、そなたはそこを息づかせる。
- 3- もし、そなたがシリアの住まいを去って、ヒムヤルとムラード族の側に移り住むなら²⁾、
- 4- 私がそなたの近くにいることに希望をつなぎ、出て行く旅人や、入って来る旅人に(私のことを) 尋ねるがよい。
- 5- もし、そなたが純血種の優れた雌馬を引き連れて³⁾、早がけしているキャラバンを見掛けたなら、

1) zād は旅の食糧のことであるが、愛の序詞では、別れに際しての思い出となる会話や口づけなどを表す。

2) 両部族ともにアルヤマンの部族。

3) muqrabāt 「野放しにせず、テントの側で育てた純血の雌馬」。

- 6- 彼らは、実は、私の仲間なのだ。彼らはアルマイスの木で作った鞍にまたがり⁴⁾、雌ラクダを一頭ずつ追い立てている。
- 7- いずれかの土地から、恋のため一人の男が死んだとか、死に瀕しているとか、もし、そなたが聞いたなら、
- 8- 疑う余地なく、それは私だと承知してくれ。身代金の支払いを受けとることなく、捕らわれて死ぬ私のために泣いてくれ” と。

4) アルマイス al-mays 柳または椰子の木の類で、鞍つくりの材料とされる。^{ʾaynuq} は ^{nāqa}「雌ラクダ」の変則的複数〔校正者注：語形成から ^{ʾanwuq} のはずが ^{ʾawnuq} > ^{ʾaynuq}。3形式いずれも正用法とされる（カイロ版コメント p. 432 を参照）〕。

